君のバスケ

JALBAS

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、〝君の名は。〟の三葉が、瀧とでは無く他のアニメの主人公と入れ替わったら・・・・

流石にマンネリ化してきたんで、６回目は、趣向を大幅に変えてみました。

かなりぐちゃぐちゃな話です。

クロス作品は、〝黒子のバスケ〟です。

読んで頂ければ幸いです。

目次

《第一話》 1
《第二話》 14
《第三話》 25
《第四話》 38
《第五話》 48
《第六話》 59
《第七話》 67
《第八話》 78
《第九話》 87
《第十話》 98
《第十一話》 111
《第十二話》 124
《最終話》

《 第一話 》

「あれ?・・・・・」
朝、目が覚めて、部屋を見渡す・・・・・僕の部屋じゃ無い。何で、こんなところで寝ているんだろう?
「お姉ちゃん、いつまで寝てるん?もう起き・・・・」
突然襖が開き、小学生くらいの女の子が顔を出す。
「あれ?・・・・居ないの?」
「あ・・・あの?」
「え?・・・・うわあっ!」
声を掛けると、その子は驚く。初対面の人は、みんなこうだ。
「い・・・いつから、そこに居たん?」
「さっきから居ました。」
「ほ・・ほんまに?・・・と・・・とにかく、ご・・ごはんやから!」
そう言って、女の子は下に降りて行った。

僕は、少し遅れて、彼女の言った言葉に違和感を持つ。
あれ？・・・あの子、〝お姉ちゃん〟って言ってなかったっけ？
そこで初めて、体の異変に気付く・・・胸のあたりが、何か重いような・・・そっと下を見ると・・・胸に見慣れない盛り上がりと、谷間が・・・・
それに、僕が来ているのは女物のパジャマだ。こんな物を着て寝た覚えは無いけど・・・・
よく部屋を見渡すと、目の前に大きな姿見がある。僕は、そこまで歩み寄って、自分の姿をじっくりと見る。
「え？・・・・」
そこに映っていたのは、同年代くらいの女の子の姿だった。
こ・・・これが、僕の顔？ど・・・どうなってるの？
考えても何も分からなかったので、とりあえず壁に掛かっていた制服に着替えて、下に降りた。
先程の女の子が、朝食を食べている。その向かいに、お婆さんが座っている。家族はこの2人だけなのかな？お父さんや、お母さんは居ないのかな？
僕も食卓に着いて、ごはんをよそう。すると・・・・
「お姉ちゃん、遅いなあ。」

さっきの子が、そう言ったので、
「来ましたけど。」
「うわっ！い・・・いつの間に？」
また、驚かれてしまった。
食事をしていると、テレビのニュースが耳に入る。
『１２００年に一度という彗星の来訪が、いよいよひと月後に迫っています・・・・』
彗星？・・・一月後？・・・そんな話、あったかな？聞いた事が無いような・・・・
朝食を終え、学校に行く事になったが、今の自分が誰なのかも分からないで行く訳にはいかないので、さっきの子は先に行かせて、僕は今の自分の部屋に戻った。
学生証を見つけて、今の自分が〝宮水三葉〟という女の子である事は分かった。学校は、糸守高校。窓の外を見ると、湖を挟んだ対岸の丘の上に学校がある。あそこがそうらしい。
この他、〝勅使河原克彦〟通称〝テッシー〟、〝名取早耶香〟通称〝サヤちん〟という友達が居ることは分かった。
家を出て、１人で通学路を歩く。周りにも、同じ高校の生徒が何人も歩いている。
しばらくすると、自転車に２人乗りした男女が、通り過ぎて行く。
「あれ？今日は三葉、おらんね。」

「先に行ったか、寝坊しとるんやろ。」
会話が聞こえて来た。
あれ？〝三葉〟って言ってなかったかな？それって、僕の事じゃ無いのかな？
学校に着いて、教室に入るが席が分からない。
よく見ると、さっき自転車で通り過ぎて行った男女が居た。近づいてみるが、やはり僕には気付かない。
「三葉、遅いなあ。」
「やっぱ、寝坊しとるんやろ。」
「あの・・・すいません。」
「え？・・・・うわっ！」
「み・・・三葉！い・・・いつの間に？」
「さっきから居ましたけど。」
「ええっ？そやった？」
「あの・・・僕の席、どこでしょうか？」
「はあ？」
「ぼ・・・ぼく？」
あ・・・そうか、今は女の子だったんだ。

「あの、私の席はどこでしょうか？」
『はあ？』
今度はステレオで、怪訝な顔をされた。
昼休み、校庭の隅で勅使河原くん、名取さんと昼食を取る。今の僕（三葉）を含めたこの３人は、いつもそうしているらしい。
「ねえ、あんたほんまに三葉？」
「はい、多分そうです。」
「た・・・多分って・・・」
「すいません。自分でもよく分からないです。」
「な・・何か、言葉使いも変やよ。」
「や・・・やっぱ、狐憑きか？」
「あと・・・今日の三葉、何か、存在感薄くない？」
「はい、いつも言われます。」
『言ってないって！』
また、ステレオで怪訝な顔をされた。
「ん・・・んんっ・・・・」

な・・・どこ?ここ・・・・

私は、見たこともない、部屋のベッドで目が覚める。もしかして・・・・これも夢?

体を起こして、部屋を見渡す・・・・姿見や、化粧台は無い。置かれている家具や、部屋の装飾を見ても・・・・何か、女の子の部屋っぽく無い・・・・

体にも、違和感を感じる。喉が妙に重い、視線を下に落としてみると・・・・胸が・・・無い?・・・・逆に下半身には・・・・何かある?ええ〜〜っ?

壁に掛けてあった制服に着替えて、私は下に降りる。まず洗面所を探し、洗面台の鏡を覗き込む。

え?・・・・こ・・・・これが、私?

そこには、ちょっと影の薄そうな、大人しそうな男の子の顔があった。

わ・・・私、男の子になってるの?

顔を洗って、リビングに行く。テーブルの上に朝食が用意されているが、誰も居ないようだ・・・・と、思っていたら・・・・

「おはよう、早く食べないと遅刻するわよ。」

「きゃあっ!」

いきなり声を掛けられて、私はびっくりして声を上げてしまう。

「どうしたの?」

気が付くと、横にお母さんと思われる女の人が居た・・・・え?この人、さっきから居た?全然、気が付かなかったんですけど・・・・

朝食後、一旦部屋に戻った。学校に行くといっても、今の自分の事を何にも知らないで行く訳にはいかない。部屋の中とスマホを調べて、以下の事が分かった。

名前は〝黒子テツヤ〟。東京都の誠凛高校に通う2年生。部活はバスケ部。主な友達は、バスケ部のメンバー。その他にメル友で、〝荻原シゲヒロ〟という人が居る。

家を出て、学校に向かう。

「うわあ・・・東京やあ・・・・」

夢に見た東京・・・・いや、これが夢なのかな?私は、しばらく見とれていた・・・・更に迷ったため、学校には大分遅刻した。

その後は、かなり大変だった。授業中に入るのはバツが悪いので、休み時間を狙って教室に入ったが席が分からず・・・・クラスメイトに話し掛けられても、名前も分からず話も通じない・・・・その上、

〝訛ってないか?〟

〝女言葉になってない?〟

〝何で認識できるんだ?〟

等と言われた。最後のは、どういう意味なのか皆目分からなかった・・・・

昼休みは、教室には居辛くて屋上に来ていた。
「はあ～っ・・・・」
と、溜息をつく。
何なんだろう?この夢・・・・夢だよねえ?でも、何で男の子に・・・・
その時、後ろから声を掛けられた。
「あれ?黒子か?」
振り向いて、思わず声を上げそうになった。
２ｍ近い長身の男子が、真後ろに立っていた。テッシーよりずっと大きい。左手はポケットに突っ込み、右手に持ったパンを食べている。
「何か、今日ははっきり見えるな。」
は?な・・・何を言ってるの?この人・・・・同じクラスじゃ無いよね?この背・・・バスケ部の人?
「ん?・・・・何で、何も言わねえんだ?」
「え?・・・・いや・・・その・・・・」
な・・・何を言えばいいの?な・・・名前も分かんないし・・・・
「ま、いいか・・・・じゃあな、放課後部活でな。」
そう言って、去って行った・・・・そういえば、部活もあるのよね?私、バスケなん

て、体育の授業でしかやった事無いんですけど・・・・

放課後、部活に出ようかサボろうか迷ったけど、やっぱりボロが出るだけなんでサボる事にした。校門に向かって歩いていると・・・・

「よう、黒子。」

運悪く、昼休みの長身の人に呼び止められてしまった。そのまま、部室まで連れて行かれる。

「・・・・・・・」

「どうした?早く着替えろよ。」

固まっていたところに、催促をされた。仕方が無いので、ロッカーを開ける。すると、戸の裏側に写真が貼ってあった。6人の男子と、女の子が一緒に写っている写真だった。ただ、その時は、その写真は気にも留めなかった。

着替えて、体育館に向かって歩いて行くと、ユニフォームのような服を着た子犬が、足元に寄って来た。

「きゃあっ!何?この犬?可愛いっ!」

「げっ、2号!」

私は、子犬を抱き上げて顔に近づける。子犬は喜んで、私の頬を舐める。本当に可愛い!

しかし、長身の彼は、何故か後ずさりをしている・・・・何で?まさか、こんな子犬が恐いとか?

「こらっ!火神、黒子、何やってんだ、早く来い!」

「は・・・はい!」

先輩・・・と思われる人に呼ばれ、名残惜しいけど子犬を離し、体育館に向かう。

そうか、この長身の子、火神くんっていうのか・・・・

部活では、また散々だった。

基礎練習までは何とかなったんだけど、実戦練習の際に、チームの人は何故か、敵に向かってパスを出す。当然、ボールは敵に取られるが・・・

「何やってんだ?黒子!」

何故か、私が怒られる・・・・何で?・・・・

翌朝、スマホのアラームで目が覚める。

自分の部屋だ・・・体にも、違和感は無い。起き上がって、姿見の前まで行って、じっくりと見る。

うん、いつもの私だ。やっぱり、夢だったのね。

と、思ったんだけど・・・・下に降りると、お婆ちゃんと四葉の様子がおかしい。

「・・・・今日は、普通やな・・・」

「昨日は、ヤバかったもんなあ・・・」
〝今日は普通〟・・・〝昨日はやばかった〟・・・どういう事？
学校に行っても、サヤちんとテッシーが・・・・
「今日は普通やね、三葉。」
「あれは、絶対狐憑きや！」
いろいろ聞いてみた感じだと、昨日の私は、まるっきり別人のようだったらしい。
自分で昨日の事を思い出そうとしても、思い出すのは黒子くんになった夢のことだけ・・・ほ・・・本当に夢だったの？

目が覚めると、自分の部屋だった。
着替えて、洗面所に行く。鏡で見ても、自分の顔だ。あれは、夢だったのだろうか？
学校に行き、特に誰にも話しかけられず、放課後、部活に行く。
「あれ？黒子君はまだ来てないの？」
「昨日は、おかしかったからな。休んでんじゃないのか？」
監督とキャプテンが、僕の目の前で会話をしている。
「あの、僕ならここに居ますけど？」
「うわっ！」

「い・・・いつの間に？」
「いえ、ずっと居ましたけど・・・・」
「き・・今日は普通ね？」
「ああ、影の薄さもな・・・・」
今日は？・・・・どういう事だろう？

「ん・・・んんっ・・・・」
な・・・ま・・また私の部屋じゃ無い！まさかまた・・・・え？どこ？ここ・・・・
私は、しばらく放心していた。また、黒子くんの部屋かと思ったら、全然違う！男の子の部屋だろうけど、かなり散らかっている。部屋のそこら中に、Hな本も転がっている。
体の感覚は、この間に近い。胸が無く、下半身には・・・・
「大ちゃん、いい加減に起きないと、遅刻するよ！」
階段の下から、女の子の声が聞こえる。
大ちゃん？・・・誰？それ？
とりあえず、制服に着替えて下に降りて行くと、ロングヘアの同い年くらいの女の子が待っていた。

「ほら、早く顔洗って、朝ごはん食べないと。」
「は・・・はい。」
「え？」
素直に返事を返したら、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をされた。な・・・何か、おかしな事言った？〝はい〟って、返事しただけなんだけど・・・・
「いつもすまないわね、さつきちゃん。」
「い・・いいえ、おばさま。」
台所から、この女の子にお礼を言う声が・・・・お母さんかな？
洗面所に行って、洗面台の鏡を覗き込む。
え？・・・こ・・・この間と、全然違う・・・・
そこには、かなり肌が黒くて、目つきの鋭い男の子の顔があった。
だ・・・誰なの？この男の子は？

《 第二話 》

「ん～っ・・・・」

何だ？スマホが鳴ってる？・・・・・アラームなんか、セットしたか？・・・・うるせえなあ・・・・

手を伸ばして切ろうとするが・・・・何か、勝手が違う・・・・いつもの場所に無い・・・面倒くせえなあ・・・・

起き上がって、気付く・・・ど・・・何処だ？ここは？俺の部屋じゃねえぞ！

更に、体の違和感に気付く。何か、胸のあたりが重い・・・・視線を下げると・・・・

「何じゃ？こりゃ？」

胸に凹凸があって、谷間がある・・・・試に触ってみると・・・・

「おお、結構気持ちいいな、これ。」

「何しとんの？自分のおっぱいが、そんなに珍しいん？」

「へ？」

いつの間にか右横の襖が開いていて、小学生くらいのガキの女が立っていた。

「誰？お前？」
「何寝ぼけとんの、自分の妹も分からんの？ご・は・ん！はよ来ない！」
そう言って、そのガキは下に降りて行った。
何だ、あれ？さっきの妹か？・・・あいつに、妹なんか居たか？自分の姉と俺を間違えるなんて・・・・いや、俺のこの胸・・・本物だ。それに、何か女物のパジャマ着てるし・・・・
よく部屋を見渡すと、目の前に大きな姿見がある。俺は、そこまで歩み寄って、自分の姿をじっくりと見る。
「な・・・何だと？」
そこに映っていたのは、完全に女の姿だった。
こ・・・これが、俺？ど・・・どうなってやがんだ？
訳が分かんねえが、とりあえず壁に掛かってた制服を着て、学校に向かっていた。
妹と言うあのガキは、朝メシの時に〝うるせえ！〟と怒鳴ったら、怒って先に行ってしまった。
しかし、何で女は、こんな下がスース―する服を毎日着れるんだ？何か、風呂上りにタオル巻いてるような感じで、落ちつかねえ・・・・
「三葉～っ！」

何か後ろから声がするが、気にせずに歩いていると・・・・

「三葉ってば～っ！」

しつこく呼んでいる・・・・何か、うるせえなあ・・・・

「三葉っ！」

「何で無視すんのやっ！」

自転車に乗った2人組みが、俺を追い越して、目の前を塞いで止まった。

何だ？こいつら？

「俺に、何か用か？」

「だから、さっきから呼んどるやろ・・・・お・・・俺？」

「何だ、三葉って、俺のことか？」

「他に、誰がおんねん？」

「で・・・お前ら誰？」

『はあ～っ？』

教室で、さっきの2人と引き続き話す。

ここまでの話によると、この2人は勅使河原と名取。今の俺は、三葉という女らしい。

2人はその親友のようだ。

「じゃあ、お前は三葉や無い言うんか？」

「ああ、ちげーよ。俺は〝青峰大輝〟、男だ。」
「何言うとんの、どっから見ても三葉、女の子やないの？」
「そんな事言われても、知らねえよ。朝起きたら、こーなってたんだからよ。」
「あかん、これは重症やわ。」
「絶対狐憑きや！直ぐに、お払いに行った方がいいで！」
「あーもう、うるせえっ！いいから放っとけよ！」
俺は、以後何を言われても、無視を続けた。
昼に、勅使河原と名取に一緒にメシを食わないかと誘われたが、断った。俺はひとり、屋上で、婆さんが握ってくれた握り飯を食っていた。
何か、むしゃくしゃすんな・・・こんな時は、体を動かすのが一番だ。
流石に制服では問題があると思ったので、屋上で体操服に着替え、体育館に向かう。
中に入ると、先客が居た。チャラけた感じの男が、女２人の前で、これ見よがしにドリブルやシュートをしている。一応バスケ部員のようだが、全然大したこと無い腕だ。それでも、女達は喜んでいる。こんなド田舎の無名校じゃ、こんなもんか？
俺が入って行くと、こちらに気付いて、その男は声を掛けて来る。
「・・・何や？宮水、そんな恰好して・・・まさか？バスケやるいうんか？」
「はあ？・・・俺が、バスケしちゃおかしいのか？」

「お・・・俺????」
「別に、お前の邪魔はしねえから、勝手に女と遊んでろよ。」
「な・・・何や、その言い方・・・俺に、何ぞ文句でもあるんか?」
「はあ?ねえよ、そんなもん。だいたい、誰だよお前?」
「松本やろ!喧嘩売っとんのか、お前?」
「売ってんのはそっちだろ!」
話が噛み合わず、口論の末、１ｏｎ１をやる事になった。気は進まねえが・・・・
「後悔すんじゃねえぞ!」
「どっちがや!バスケ部の実力、思い知らせてやるで!」
「がんばれ～松本!」
「七光りなんて、こてんぱんにしたれや～!」
女どもは、このチャラ男に声援を送っている。しかし、〝七光り〟ってのは何だ?
「じゃあ、行くぜ!」
俺のボールでスタート。余裕かましてハンデのつもりだろうが、甘い。
俺は速攻で、チャラ男の横を抜く。案の定、チャラ男は、全く俺の動きに付いて来れない。一気にゴール下に掛けより、シュートを決める。
ほう?意外と反応いいじゃねえか、この体。運動神経は、悪くねえみてえだな。

「な・・・何や?・・・何で?」

チャラ男は、信じられないような感じで、放心している。ギャラリーの女どももだ。

「これで分かったろ・・・・じゃあ、俺はひとりでやるから、お前はお前で楽しんでろよ。」

「ま・・待て!今のはまぐれや!も・・もう1回や!」

「はあ?何度やったって同じだよ。」

「ええから、もう1回や!」

「分かったよ、気が済むまでやってやるよ。」

結局、昼休みの間中付き合わされた。当然、全て瞬殺で、松本とかいうチャラ男はあえなく撃沈。限界を通り越して、床に突っ伏している。こっちは、大して汗も掻いていない。まあ、チャラ男の慌てぶりが滑稽だったんで、気晴らしにはなったが・・・・

『おお〜っ!』

いつの間にか、ギャラリーが増えていて、最後の方は歓声も上がっていた。やけに、男が多いのが気になるが・・・・

「ちょ・・・ちょっと、三葉!」

そこに、いきなり名取が入って来て、俺の手を引く。

「な・・・何だよ?」

「いいから、こっち来て!」

名取は、体育館の外まで俺を引っ張っていく。
「あ・・・あんたまさか、着けてへんの?」
「へ?・・・何をだ?」
「だ・・だから、ブラやよ!」
「あ・・・あたりめえじゃねえか。何で、俺がそんなもん着けるんだよ?」
「あちゃ〜っ・・・・」
そう言って、名取は、手で顔を覆って俯いてしまう・・・・

「ん・・・んんっ・・・・」
な・・・ま・・また私の部屋じゃ無い!まさかまた・・・・え?どこ?ここ・・・・
私は、しばらく放心していた。また、黒子くんの部屋かと思ったら、全然違う!男の子の部屋だろうけど、かなり散らかっている。部屋のそこら中に、Hな本も転がっている。
体の感覚は、この間に近い。胸が無く、下半身には・・・・
「大ちゃん、いい加減に起きないと、遅刻するよ!」
階段の下から、女の子の声が聞こえる。
大ちゃん?・・・誰?それ?

とりあえず、制服に着替えて下に降りて行くと、ロングヘアの同い年くらいの女の子が待っていた。
「ほら、早く顔洗って、朝ごはん食べないと。」
「は・・・はい。」
「え?」
素直に返事を返したら、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をされた。な・・・何か、おかしな事言った? 〝はい〟って、返事しただけだけど・・・・
「いつもすまないわね、さつきちゃん。」
「い・・いいえ、おばさま。」
台所から、この女の子にお礼を言う声が・・・・お母さんかな?
洗面所に行って、洗面台の鏡を覗き込む。
え?・・・こ・・・この間と、全然違う・・・・
そこには、かなり肌が黒くて、目つきの鋭い男の子の顔があった。
だ・・・誰なの?この男の子は?
その後、超特急で朝食を済ませて、学校に向かう。さつきちゃんが待っていたため、今の自分を確認する時間が無かった。でも、さつきちゃんが居るので、学校への道のりは問題無いだろう・・・・ただ、未だに自分の名前が分からない。

〝大ちゃん〟だから、〝大介〟とか、〝大吾〟とか・・・・まさか、〝大左衛門〟って事は無いわよね？

「ねえ？大ちゃん？」

「は・・・はい？」

呼ばれたので返事をしたが、また、怪訝な顔をされた。何で？この大ちゃん、いつもは返事をしないの？

学校に行くまでの間に、このような問答が何度もあり、相当不審に思われた。

そんなこんなで、ようやく学校に着いた。学校は、〝桐皇学園高校〟だ。この間の、黒子くんの学校とは違う。

さつきちゃんは、クラスが違うようで、私の教室の前で別れた。

その後が、また大変だった。例によって席が分からず・・・・クラスメイトに話し掛けれれても、名前も分からず話も通じない・・・・ただ、今の私の名前は〝青峰大輝〟で、バスケ部の所属という事は分かった。何で、またバスケ部なの？

昼休み、さつきちゃんが、お昼を一緒に食べようと誘って来たので、一緒に屋上に行った。

「さあ、召し上がれ。」

と言って、渡されたお弁当を見て、私は凍りついた・・・何なの？これは？と・・・

とても、食べ物には見えない・・・・ほ・・・本当に、食べて大丈夫なの？体に、害は無いの？

「どうしたの？早く食べて。」

さつきちゃんは、満面の笑顔で勧めて来る。こんな顔をされると、とても断れない。

ここは、我慢して、食べるしか無い・・・・

ひょっとしたら、見てくれは悪くても味がいいかなと思って、一口食べてみた。

「う・・・・」

思わず、吐き気を催して来た・・・・あ・・・味も、最悪・・・・こ・・・こんな物とても・・・・

そう思って、さつきちゃんの顔を見る。天使のような笑顔が、私を攻め立てる・・・・天使のような・・・・悪魔だ！

どうしてもこの笑顔に逆らえず、私は、死ぬ思いでそのお弁当をたらい上げた・・・・

午後の授業には、出られなかった。

私はひとりトイレに篭り、そのまま、夕暮れまで出て来れなかった。

放課後、体育館で　――――

「青峰はどうした？またサボリか？あの野郎！」

「あ・・・あの・・・・」

「ん?どうした、桃井?」
「だ・・大ちゃんは、わ・・・私のお弁当にあたって・・・・」
お腹は辛いけど・・・・部活に出なくて良くなったのは、助かった・・・・かな?

《 第三話 》

ん?・・・・スマホのアラームが鳴ってる・・・・?!
私は、思わず飛び起きた。そして、辺りを見回す・・・・私の部屋だ。
や・・・やっぱり夢だったのね。な・・・何で、こんな変な夢ばかり見るのかな?
ところが、着替えて下に降りて行くと・・・・
「・・・・・」
四葉が、何も言わない。挨拶をしても、話し掛けても、目を瞑って、全く答えない。
「ねえ、四葉、何をそんなに怒っとんの?」
すると、冷やかな目で私を見つめて・・・・
「自分の胸に聞きい!」
そう言って、そそくさと出て行ってしまった。な・・・何なのよ?あの態度は?
私は、お婆ちゃんにも聞いてみる。
「お婆ちゃん、四葉は、何であんなに怒っとんの?」
「ん?そらあ、あんな言われ方したら、怒るやろ?」

「え？・・・どんな？」

お婆ちゃんの話によると、昨日、また私の様子がおかしかったようだ。四葉は心配して、私にいろいろ聞いてきたが、その度に私は〝うるせえっ！〟と言って突っぱねたそうだ。そんな覚えは、もちろん全く無い・・・というより、また、昨日の記憶が無い。

更に学校に行って、サヤちん達に話を聞いてまた驚いた。

完全に〝俺様〟調で、男言葉で、話が詰まると〝うるせえ！〟を連発。しまいには、バスケで松本を、完膚無きまでに叩きのめしたそうだ。それも、ノーブラで胸をバンバン揺らしながら・・・聞いていて、恥ずかしくて顔が真っ赤になった。

「松本は、相当ショックやったようやな。今日は、休んどる。」

「三葉、本当に何も覚えとらんの？」

「うん、私、どうしちゃったんやろ？」

「やっぱ、狐憑きか？」

「あんた、そればっかやね？」

「ねえ、昨日の私、他に変な事言って無かった？」

「ん～っ・・・そういや、〝俺は青峰大輝だ〟とか言っとったな。」

「え？」

青峰大輝？それって、昨日の夢で、私がなってた男の子・・・じゃあ、あれは夢じゃ

無くて、私と青峰くん、入れ替って・・・・

「ん・・んんっ・・・・」

翌朝、目が覚めると・・・・な・・・ま・・また私の部屋じゃ無い!く・・・黒子くん?それとも、青峰くん?・・・・・え?ここ・・・・ま・・・また、全然違う!

直ぐに、部屋の中を調べて、今の自分を確認した。

〝緑間真太郎〟、秀徳高校の2年生、またもバスケ部だ。主な友達は、同級生でバスケ部の〝高尾和成〟。

立ってみると、視点が全然違う・・・・背が、かなり高い。黒子くんは、私と大差無かったのに・・・・あれ?な・・・何か、視界がぼやけてない?

辺りを見回すと、ベッドの脇に眼鏡ケースが置いてある。そこから眼鏡を取り出して、かける・・・・あ、これで見えるようになった。

「お兄ちゃん、ごはんだよ!」

下から、女の子の声が聞こえる。この男の子も、妹が居るの?

下に降り、まず洗面所に行って、洗面台の鏡を覗き込む。

こ・・・今度は、眼鏡もあるせいか、インテリっぽい男の子だ・・・・凄く、背が高い。この間の、誠凛の火神くんくらいあるんじゃないの?こ・・・これも入れ替ってるの?で・・・でも、何で、毎回毎回違う男の子と?

朝食を終え、家を出る。学校に行かなきゃいけないんだけど・・・・
青峰くんの時は、さつきちゃんに連れてってもらったから良かったけど、黒子くんの時は、かなり迷った。今回は、大丈夫かな？東京って、本当に迷路みたいで・・・・
と、家の前で考え込んでいると・・・・
「あれ？何、突っ立ってんの？真ちゃん？」
「え？」
声のする方を見ると、自転車に乗った高校生がこちらに向かってくるが・・・ええ～っ？
何とその子は、自転車でリアカーを引いていた。何で？
「も・・もしかして、高尾くん？」
「もしかしなくても俺だよ、何言ってんの？」
「い・・いや・・・あの・・・・」
「そんな事より、早く乗って！急がないと、遅刻しちゃうよ！」
「え？」
「昨日の賭け将棋で負けて、今日俺が学校まで乗っけてくって事になったろ。」
「え？ま・・・まさか、そのリアカーに乗るの？」
「何言ってんだよ、いつも乗ってんじゃん？」

ええ～っ?ど・・どういう人なの緑間くんって?友達を、奴隷みたいにこき使って・・・

「あれ?今日は、何も持ってないじゃん。」

「え?何もって?」

「ラッキーアイテム。」

ラッキーアイテム?な・・・何?それ?

「テーピングもしてないし・・・・」

テーピング?だめ、全然訳が分かんない・・・・

そんな問答を繰り返していると遅れるので、〝いいから乗れ〟と言われて、リアカーの後ろに座らされた。でも、メチャクチャ恥ずかしかった。おかげで、学校には迷わずに行けたけど・・・・

授業中は、できるだけ大人しくして、休み時間には席を外してやり過ごした。

でも、部活の方はそうはいかず、サボろうとしたら高尾君に見つかってしまった。

それでも、基礎練習は何とかこなしたんだけど、問題はその後。緑間君は別メニューになってるようで、シュート練習をやるハメになった。

また高尾君が〝賭けに負けたから〟といって準備をしてくれたんだけど、いきなりコートの端に立たされて、その位置から、反対側の端のゴールにシュートを入れろというのだ!

何？これ？ひょっとして、いじめ？こんなところから、どうやったらあんな遠くのゴールに入るのよ？冗談じゃ無いわ！

「あれ？どうしたの真ちゃん？打たないの？」

高尾君、ひょっとして、リアカー引かせた報復をしてるの？で・・でも、悪気がありそうな顔には見えない・・・・

「緑間！何をしている！さっさと始めろ！」

いつまでも突っ立ったままなので、主将の激が飛んでしまう。仕方が無いので、覚悟を決めて、打ってみることにする。

「ていっ！」

遠いから、思いっきり投げてみるが、投げ方も良く分かって無いので、ボールはコートの真ん中にすら届かなかった。

「え？・・・何やってんの？真ちゃん？」

高尾君が、とんでも無いものでも見たような顔をする。

「い・・いや・・・今の、なし・・・無しね・・・」

ちょっと手投げだったかな？・・・・もっと、腰を落として・・・・

今度は、腰を落として反動を付けて投げる・・・・でも、やっとコートの真ん中辺りに届いた程度だ・・・・

「まじめにやってる?真ちゃん?」

大真面目ですよっ!こんなの、出来る訳無いじゃない!

心の中で叫びながら、3投目・・・・遠くに投げるんだから、高く上げなくっちゃっ!

今度は、思いっきり高く投げる・・・・ボールは真上に上がって、そのまま、自分の頭の上に落ちて来た。

「い・・・痛ったあ〜っ!」

高尾君が、私の肩に手を置いて言う。

「ごめん、真ちゃん・・・・」

え?

「いつも俺が、〝ユーモアが無い!堅すぎる!〟って言うから、必死に考えてくれたんだね。」

い・・いや、そうじゃ無くて・・・

「よ〜く分かった、真ちゃんには、ユーモアのセンス全く無いから、もう、無理に笑い取ろうとしなくていいよ。」

そうじゃ無いの!私はこれでも、必死なんだってば〜!・・・・もう、いや〜っ!

アラームの音で目が覚めたが、目覚ましの音では無い・・・・

目を開け、体を起こして、部屋の中を見る・・・・何処だ?ここは?・・・・・ん?何故、こんなに視界がはっきりしている?眼鏡をかけていないのに・・・・

ふと、体の違和感にも気付く。胸が、やけに重い。下を見ると・・・胸に凹凸が・・・・

「何だ?これは?」

思わず、声を出してしまった。

「・・・・・」

ふと、視線を感じて横を見る。襖を開け、ひとりの幼女が、じっと俺を見ている。

「・・・・ごはんやよ・・・・」

それだけ言って、下に降りて行ってしまう。何だ?あの幼女は?いや、そんな事より、今は体の異常を確認するのが先だ。

目の前に姿見を見つけて、俺はその前に立つ。そこに映っていたのは、完全に女の姿だった。

こ・・・これが、俺だと?ど・・・どういう事なのだ?

部屋の持ち物で確認した限り、俺は〝宮水三葉〟という女になっているようだ。いつまでも動揺していてもどうにもならないので、とりあえず壁に掛かった制服を着て下に降りた。

さっきの幼女と婆さんが、既に朝食を食べている。家族は、この２人だけか？

空いてる席に座って、俺も飯を食べる。横の幼女は、この女の妹なのか？さっきから、何も言わずに黙々と食べているが・・・・

「いい加減に、仲直りしない。」

婆さんがそう言う。何だ？喧嘩でもしているのか？

そんな時、テレビのニュースが耳に入って来る。

『１２００年ぶりの彗星の接近まで、ひと月を切りました・・・・』

ふと、時間が気になって、部屋の時計を見る。時間を見て、俺はテレビのチャンネルを変える。

「ああっ、何で変えるん？」

「おは朝の、占いの時間なのだよ。」

「はあ？何なん、それ？もう知らん！」

そう言って、妹は怒って席を立って行ってしまった。何を、そんなに怒っているのだ？

朝食の後、学校に向かう。

しかし、凄い田舎だ。紫原の居る陽泉は、こんな感じだろうか？

「三葉～っ！」

後ろから声を掛けられ、振り返る。自転車に2人乗りした男女が、走って来る。おそらくあれが、勅使河原と名取だろう。この女の持ち物で確認した限り、主な友人はあの2人だけだ。

「おはよう、三葉。」

「ああ、おはよう。」

一応、挨拶を返しておいた。

「あれ?また、髪が・・・・」

「ま・・・また、狐憑きか?」

髪?・・・長いので後ろで纏めただけだが、それがどうかしたのか?それに、狐憑きとは何だ?

「ん?・・・な・・・何や?それ?」

勅使河原が、俺の持つ〝招き猫〟に疑問を持つ。

「ラッキーアイテムなのだよ。」

「ラッキーアイテム?」

「・・・なのだよ?」

余計に、疑念を持たれてしまった。しかし、説明しても理解されるとは思えなかったので、何も答えなかった。

学校に行くと、今度は別な男から声を掛けられた。
「おう宮水、この間は、ようもやってくれたな?」
何だ?この男は?この女の友人は、さっきの2人だけでは無いのか?
「松本、何言うてんの?元は、あんたから絡んだんやろ!」
「引っ込んどれ、名取!俺は、宮水と話しとんのや!」
〝松本〟というのか?唯の、クラスメイトか?
「リベンジマッチや!今日の昼、つきあえや!」
何の事だか分からないが、断ると余計にこじれそうなので付き合うことにした。
昼休み、体操服に着替えて体育館に行く。
松本は、バスケットボールを持って待っていた。何だ、俺にバスケ勝負を挑むつもりなのか?身の程知らずもいいとこだな。
「だ・・・大丈夫か?三葉?」
勅使河原と名取も、心配して付いて来た。それだけでは無く、他の生徒も大勢見にきていた。おそらく松本が、呼び寄せたのだろう。
「問題無いのだよ。」
糸守高校など、聞いた事が無い学校だ。こんなところに、俺と対等に闘える選手がいるとも思えん。

「ドリブルは、得意なようやな?せやけど、バスケの花は３Ｐや!今日は、３Ｐで勝負や!」

フリースローラインのところに、籠に入れられボールが沢山置かれている。

「まず俺からや!お手本やから、よう見とけ!」

松本は、フリースローラインから、３Ｐを放つ。

なってないな。フォームが汚い。あんな投げ方じゃ、３回に2回は外す。それに、ろくに練習もしていないようだ、足腰が不安定だ。

ボールは、リングに当たってふら付いたが、何とかゴールに入った。しかし、美しくない!美の欠片も無い、低俗なシュートだ!

「さあ、お前の番や!やってみい!」

あの程度のシュートで、得意そうな顔をするな!虫唾が走る!適当に手を抜いてやろうと思っていたが、こいつは許せん!

俺は、ボールを持ってコートの中央に立つ。

「な・・・何やっとるんや?ま・・・まさか、そこから打ついうんか?」

「うるさい!黙って見ているのだよ。」

慣れない体だから、この辺が限界だろう。だが、体は柔らかいし、反応は悪くない。何より、今日の蟹座の運勢は最高だ、外す懸念は微塵も無い。

俺は、そこからシュートを放つ。ボールは綺麗な放物線を描き、リングの中央をすり抜ける。うむ、初めての体にしてはいい方だ。

『おお～っ！』

「な・・・なんやと？」

周囲からは歓声が、松本からは、情け無い言葉が発せられる。直後に、体育館中から拍手が沸き起こる。

「み・・・三葉・・・」

「す・・・すげえ・・・」

勅使河原と名取も、驚嘆の声を上げているが、俺にとっては日常の事だ。別に驚く事では無い。

「さて、お前の番だが、まだやるか？」

腰を抜かしてへたり込んだ松本は、言葉を発することができず、首を思いっきり横に振るだけだった・・・・

《 第四話 》

「ごめんなさい、ね、反省してますから・・・許してっ！」
「・・・・」
「お願いやから・・・ね、四葉、四葉ちゃん、四葉様っ！」
「・・・・」
「四葉ってば～～～」
しかし、四葉は何も答えず、朝食を終えて、そそくさと居間を出て行ってしまう。
「うえ～ん、お婆ちゃ～ん！」
私は、お婆ちゃんに泣き付く。
「仕方あらへんねえ・・・・しばらく、放っときい。」
「そ・・・そんなあ・・・・」
黒子くん、青峰くん、緑間くんと続いた入れ替り。その間の彼らの、妹四葉に対する対応に怒り心頭の四葉は、私とは、全く口を聞いてくれなくなってしまった。まさか、〝東京の男の子達と入れ替ってました〟等と言っても、信じてくれる筈も無い。どうした

らいいの？

「はあ～っ・・・・」

学校に来て、溜息をつく私・・・・

「大丈夫？三葉？」

「全然、大丈夫やない・・・・」

心配するサヤちんに、私はそう答える。

学校内でも、落ち着いていられない。例の松本とのバスケバトルのせいで、今や私は校内で、注目度Ｎｏ．１の女子になってしまった。暇さえあれば、女子バスケ部が勧誘に来る。また、バスケ部だけで無く、その他の運動部までもが勧誘して来た。下級生の女の子には、サインを求められる程だ。

「例によって、何も覚えとらんのか？三葉？」

「うい・・・・」

テッシーの問いに、机に突っ伏して、力無く答える。

覚えている訳が無い。それをやったのは、私では無いんだから・・・でも、何で、毎回毎回違う男の子と・・・それも、全員バスケ部で、超一流選手で・・・・え？

私は、ふと思った。そんなに凄い選手なら、メディアでも騒がれているんじゃ？

バスケの事は、バスケ部に聞くのが一番だ。また勧誘されるのは嫌だったので、男子

バスケ部の人に聞いてみる事にした。クラスメイトの松本がバスケ部なんだけど、こんな状況で松本に聞ける訳も無いので、隣のクラスの子に聞いた。

「ねえ、バスケの強い学校で、誠凛とか、桐皇とか、秀徳って知ってる?」

「おおっ!流石やな宮水、強豪高はしっかりチェックしとるやないか?桐皇も秀徳も、関東の超強豪高や!せやけど、誠凛ってのは知らんな。新鋭の注目高か?」

「え?そうやの?」

誠凛は、強豪じゃないの?そういえば、青峰くんと緑間くんは松本をボコボコにしたみたいだけど、黒子くんは、何もしなかったみたいだし・・・・

「じゃあ、その高校に、青峰くんとか、緑間くんっていう凄い選手がおるの?」

「え?青峰に緑間?・・・・知らんなあ、聞かへんで、そんな選手。」

「え〜っ?」

結局、黒子くん達の事は分からず終いだった。

家に帰っても、四葉の機嫌はまだ直らなかった。お婆ちゃんの言うように、しばらくは放っておくしかない。それよりも、夜、寝るのが怖かった。また、誰かと入れ替ってしまうのか?そんな不安に駆られながらも、結局は寝てしまったのだが・・・・

「ん・・んんっ・・・・」

翌朝、目が覚めると・・・・やはり、私の部屋じゃ無い!またなの?

起き上がって、辺りを見回して、頭を抱える・・・・また、全然違う！

今回の私の入れ替わりの相手は、〝黄瀬涼太〟。海常高校の２年生、当然バスケ部だ。ただ、今迄の男の子と違ってかなりイケメンで、アドレス帳も、女の子の名前が異常に多い。かなり、モテるのだろう。

住所は、東京では無く神奈川県だった。かなり東京寄りではあるが。

東京では無いといっても、田舎の私から見れば殆ど同じで、学校まではかなり迷った。

黄瀬くんは誰とでも気さくに話すタイプのようで、やたらと声を掛けられたが、当然満足な対応は取れず、目一杯周りに不信感を与えてしまった・・・・自分も、黒子くん達の事を文句言ってられる立場じゃ無いなと、つくづく痛感した。

放課後は、逃げるように学校を後にした。当然、部活はサボりだ。黄瀬くんがどんな選手かは知らないが、まず間違い無く超一流選手だろう。私なんかに、代役が務まる筈が無い。

家に帰ると、今度はスマホに着信の嵐だった。

いきなり、バスケ部の主将から電話が掛かって来たが、

『こっ！なんでんしゅうこない？たんでぞ！』

「は？」

『そで、せいんにかてか！』

何の暗号か分からず、切ってしまった。
その後は、女の子からの電話が何件も、
『黄瀬くん？今から出て来れない？』
『リョー君、何で最近電話くれないの？』
『涼太、今から行っていい？ご飯作ってあげる！』
いちいち、断るのが大変だった。
変わったところでは、モデル会社からの仕事の依頼の電話まであった。流石、都会のイケメン・・・・モデルまでやってるんだ。
その日は、スマホの電源を切って、もう夜の7時には寝てしまった・・・・

「ん～っ・・・・え？」
朝起きると、見た事も無い部屋の中だった。
つうか・・・女の子の部屋じゃねえ？壁に掛かっている制服も、女子のだし、着ているパジャマまで・・・・って、ええっ？
胸には、盛り上がりと谷間がある・・・・触ってみると・・・・感じる、本物だ！
「ほんまに、自分のおっぱいが好きやね。」
「え？」

気付くと、右手の襖が開いていて、小さな女の子が、冷やかな目でこっちを見ている。
「ごはんやよ・・・・」
それだけ言って、下に降りて行ってしまう。誰だ?あの女の子は?
部屋を見渡すと大きな姿見があったので、その前まで行って自分の姿を映す。
「え?」
そこに映ってるのは、同い年くらいの女の子の姿だった。
お・・・俺、女の子になってるの?
俺は、制服に着替えて下に降りた。夢だか何だか知らないけど、女の子になるなんて中々経験できる事じゃない。せっかくだから、少しこの生活を満喫してみようかと思った。
「おはよう!」
居間で朝食を取っていた、さっきの子と、お婆さんに挨拶する。お婆さんは返事をしてくれたが、少女の方は無視だ。さっきの様子もそうだったが、何か機嫌が悪いのかな?まあ、ここは深入りせずに、流しておこう。
テレビでは、〝彗星最接近まで、あと3週間〟とかいうニュースをやっている。あれ?そんな話あったっけ?でも、最近はモデルの仕事も復活させて忙しかったから、あんまりニュース見れて無かったけど。

朝食を終え、学校へ田舎道を歩く。建物も少なく、殆ど車も走っていない。かなり山の中のようだ。都会育ちの俺には凄く新鮮で、何だか楽しい気分になって来る。

「三葉～っ！」

後ろから呼ぶ声がする。出る前に、最低限の確認はして来た。今の俺は〝宮水三葉〟、糸守高校の２年生の女子。友達は、今声を掛けてくれた２人組、勅使河原克彦と名取早耶香。

「おはよう、三葉。」

「おはよう、勅使河原っち！名取っち！」

「勅使河原っち？」

「名取っち？」

２人は、怪訝そうな顔をする。まあ、そんなの俺は気にしない。

「み・・・三葉、その髪・・・」

「ああ、似合うっしょ？」

髪が長かったんで、ドラマ〝カインとアベル〟の倉科カナ風に纏めてみた。

「いつもの結い方と違うやん。」

「組紐使っとらへんし。」

「たまにはいいっしょ！」

まあ、初めてなんだけど。
「ちょ・・・ちょっと、三葉！」
名取っちが、俺の指を見て驚く。
「ネイル塗っとるの？」
「ああ、一度やってみたかったんス。せっかく、女の子になったんスから・・・」
「女の子になった？」
「あ・・いや、こっちの話っス。」
「だめやよ！校則で、禁止されとるやろ！」
「ええ～っ？」
やっぱ、田舎はそういうの厳しいのか・・・・うちの学校じゃ、自由なのに・・・・
昼休みは、勅使河原っちと名取っちと、３人で校庭の隅で昼食を取る。
「いや～、大自然の中で食べるランチ、最高っスね！」
「ね・・・ねえ？」
「ん？何っスか？名取っち？」
「あんた・・・ほんまに三葉？」
「そうっスよ。」
「いや、全然そうに見えないんやけど・・・・」

俺は、そんな2人の事は気にせず、大自然の中の女子高生ライフを満喫していた。
「ただいま～っ！」
家に帰ると、例の妹はまだ怒っているようで、全く返事をせずむくれている。
「四葉、いい加減に仲直りしいや。」
お婆さんがそう言っても、無視して行ってしまう。
名前は〝四葉〟っていうのか・・・・勿体無いなあ、あの子、笑えばとっても可愛いと思うのに・・・・ん？そうだ！
俺は、四葉ちゃんの後を追って、声を掛ける。
「ねえ、四葉ちゃん？」
「・・・・・」
凄く機嫌の悪そうな顔で、四葉ちゃんは振り向く。
「何か、食べたい物無い？何でも、好きな物作ってあげるよ。」
「え？ほんと？」
四葉ちゃんは、やっと笑った。やっぱり、笑うとすごく可愛い。
・・・・ん？・・・・携帯の、アラームが聞こえる・・・・
「?!」

私は、慌てて飛び起きた。直ぐに部屋の中と、自分の体を確認する・・・自分に戻ってる・・・?!

気付くと、右の襖が開いていて、四葉が立っていた。

ま・・・まさか、黄瀬くんも、四葉を怒らせるような事を・・・・

自分の顔から、血の気が引くのが分かった。〝何か言わなければ〟と思うが、言葉が出ない。

「どうしたん?お姉ちゃん?・・・ごはんやよ。」

四葉は、にっこり笑ってそう言って、下に降りて行った。

「え?・・・・」

私は、しばらく放心状態で動けなかった・・・・

《 第五話 》

「あれ?」
紫原は、朝起きて自分が見た事も無い部屋に居る事に、疑念を抱く。
「どこ?・・・ここ?」
虚ろな目で、辺りを見回す。すると、自分を見つめる少女の存在に気付く。
「あの～・・・・」
「いつまでも寝ぼけとらんで、ごはんやよ。」
それだけ言って、少女は下に降りて行ってしまう。のっそりと喋ったため、彼は、最後まで言葉を発する事ができなかった。
「何か・・・体が軽いなあ・・・・」
のっそりと立ち上がり、姿見の方まで歩いて行く。そして、そこに映っている自分の姿を見る。
「・・・あれ・・・これが、俺?・・・何で?」
しばらく、立ったまま考え込んでいたが、次第に考えるのが面倒になって来たため、

彼・・・いや彼女は、壁に掛かっていた制服に着替えて下に降りた。
居間に行くと、先程の少女とお婆さんが朝食を食べていた。腹は減っていたため、三葉（中身は紫原）はそのまま席に座り、朝食を食べた。
食事の途中、四葉が何度か三葉に話し掛けたが、〝あ〜〟とか〝う〜〟とかの片言しか返って来ないため、まだ寝ぼけているのかと思い、呆れて先に学校に行ってしまう。
三葉が、いつまでもご飯を食べていて動かないので、お婆さんが、
「いつまで食べとるの？早よう行かんと、遅刻やよ。」
と言うが、三葉は、
「え〜っ？今日は、何かおかしいから、行きたく無い。」
と言う。しかし、そんな我儘が通る筈も無く、最後には怒られて追い出された。
「は〜っ・・・・どこ？ここ？」
やる気無さそうに、とろとろと歩く三葉。
「三葉〜！」
その後ろから、テッシーとサヤちんが、いつものように自転車に2人乗りしてやって来る。
「おはよう、三葉。」
「え？・・・・誰？」

『はあ?』

三葉の反応に、怪訝な顔をする2人。

「俺が分からんのか?勅使河原や!」

「早耶香やよ!」

「ああ、そう・・・てしチンと、さやチンね?」

「て・・・てしチン?」

「な・・何か、イントネーションが違うんやけど?」

今日の三葉の髪も、後ろで纏めただけの〝侍モード〟だったが、もう2人は、そこは突っ込まなかった。

しばらく歩いて行くと、右手に、この町唯一のコンビニが見えて来る。

「あの〜〜〜」

「え?何、三葉?」

「ちょっと寄っていい?」

三葉は、コンビニを指差して言う。

「べ・・・別にええけど。」

待つ事数分、コンビニから出て来た三葉を見て、テッシーとサヤちんはまた驚く。彼女は、〝まいう棒〟を袋ごと買って来て、既に1本は、食べながら出て来た。

「お待たせ～」
「な・・何や、三葉！そ・・それ？」
「だって・・・・お腹が空くから・・・・」
「朝ごはん、食べて来たんやろ？」
「でも～～～～」
　そんなやりとりをしながら、三葉達は、町営駐車場の前に差し掛かる。そこでは、三葉の父で現職糸守町長の〝宮水としき〟が町長選挙の演説をしている。
　そんな彼の目に、見っともなく、お菓子を食べながら歩く娘の姿が映る。
「こら！三葉！何だ、食べながら歩いて、行儀が悪い！」
　その声に、気だるそうに顔を向ける三葉。
「ん～？・・・・・誰？あれ？」
「ちょ・・・ちょっと三葉、いくら喧嘩中やからって、お父さんに〝誰？〟は無いやろ！」
「え～？・・・・でも、俺、三葉じゃ無いし・・・・」
　そう言って、三葉は向き直って歩き出す。もちろん、食べ歩きは止めずに・・・・
「こ・・こら！三葉！止めなさいと言ってるだろ！おい、こら～っ！」
　としきがいくら叫ぼうと、三葉は、２度と振り向きはしなかった・・・・
　学校に来ても、テッシーとサヤちんは頭を抱えていた。

流石に教室内では〝まいう棒〟は食べていないが、三葉は、気だるそうに机に突っ伏して、殆ど動こうとしなかった。
「何なんや、今日の三葉は?」
「今迄の中でも、最悪やわ。」
そこに、クラスメイトの松本が寄って来た。
「み・・・宮水、きょ・・今日こそは、汚名返上したる!昼休みに、もう一度勝負せいや!」
「え～・・・やだ～・・・・」
「な・・・何やと?」
「めんどくさ～い・・・・」
「な・・・何言うとんのや!こ・・このままじゃ、俺の気が収まらへん!いいから、勝負せいや!」
「だから～、やだって言ってるじゃ～ん。」
「そ・・・そんなん、通ると思っとんのか?つべこべ言わずに・・・・」
次の瞬間、三葉の目が据わる。そして、勢いよく立ち上がった三葉は、松本の頭を鷲掴みにする・・・と言っても、三葉の方が背が低く、手も小さいのでそのような描写にはならないのだが、三葉の発する異様なオーラが、周りにそのような錯覚を見せてい

た・・・・

「うるさいなあ・・・・あんまりしつこいと、捻り潰すよ!」

「な・・・何すんのや!」

松本は、直ぐに三葉の手を振り解こうとするが・・・・

「い・・・痛い!いたたたたたたた!」

とても女のものとは思われない、凄まじい力で頭を締め付けられてしまう。

「捻り潰すよ!いい?」

「や・・・やめて・・・わ・・・分かった・・分かりましたから・・・離して!」

そこでようやく、三葉は手を離す。松本は、その場にへたり込んでしまう。その松本を、冷ややかな目で三葉が見下ろす。

「分かったら・・・・どっか行って。」

「は・・・はいいいいいっ!」

完全にたじたじの松本は、脱兎のごとく教室を出て行った。

それをずっと見ていたテッシーとサヤちんは、更に頭を抱えるのであった。

「あかん・・・キャラが、全然違う!」

「ほんまに、どないしたんや?三葉・・・・」

最近は、朝起きるのが怖い。目が覚めると、また別の見た事も無い部屋で、また別の男の子になっているんじゃないかと、心配で夜は寝付けない。

でも、結局は寝てしまい、目が覚めると・・・・・まただ！

今日は、こじんまりとした、狭い部屋で目が覚める。ベットを降り、立ち上がると・・・

「え？」

視点がメチャメチャ高い、緑間くんの時よりも更に。ど・・・どれだけ大きいの？この人？

部屋には鏡が無いので、洗面所に行こうと部屋を出る・・・・

「痛っ！」

入り口に、頭をぶつけて・・・いや、ほぼ顔をぶつけてしまった。背が、高すぎるのよ、この人・・・・

部屋を出ると、長い廊下になっていて、同じようなドアがいくつも並んでいる。寮か何かのようだ。多分、バスケ部の寮なんだろう。この男の子も、バスケ部に違い無い。

洗面所を見つけ、鏡を覗き込む。

「こ・・・これが、今日の私？」

身長は２ｍ以上有るだろう。長髪の、あまり目付きの良くない男の子の顔が、そこにあった。しかし、これで、本当に高校生？姿を見ただけで、町の不良も逃げ出しそう

だ・・・・

「やあ、おはよう、敦。」

声を掛けられ、振り返る。そこには、この男の子程では無いが、背の高いイケメン男子が立っていた。同じ寮の、バスケ部の子だろう。

「お・・・おはよう・・・」

愛想笑いをしながら、挨拶を返す。すると、思いっきり怪訝な顔をされた。

またか・・・・どうして私が入れ替わる子達って、普通に挨拶をしないの？

部屋に戻って分かった事だが、彼の名は〝氷室辰也〟、私と同じ高校2年生。そして今の私は〝紫原敦〟。共に、秋田県の陽泉高校のバスケ部員で、寮で生活している。

しかし、何で秋田？いきなり、関東から離れちゃったんですけど・・・・

寮から学校は近いので、歩いて移動する。まだ9月とはいえ、秋田は結構寒い。

紫原くんは口数の少ない人で、人付き合いも苦手なようなので、話し掛けられる事が無くて助かる。最も、こんな怖そうな巨人に、気さくに話せる人も少ないと思うけど・・・・

但し、氷室くんには、かなりおかしく見られた。

「敦、今日は、何も食べないんだね？」

「え？ちゃんと、朝ご飯食べたけど・・・」

「そうじゃ無くて、〝まいう棒〟とか？」
「まいう棒???」
どうも、紫原くんは、暇さえあれば〝まいう棒〟等のお菓子を摘まんでいるらしい・・・
紫原くんて、お菓子が好きなんだ・・・それとも、体が大きいから、食べる量が半端じゃ無いだけかな？
授業中は問題無かったんだけど、やはり、部活ではそうはいかない。サボろうとしても、帰るところが寮なので、そういう訳にもいかない。しかし、流石２ｍの巨人、普通に動くだけでも、大抵の人は太刀打ちできない。
本当は、私がうまくできていないだけなんだけど、多少失敗しても手を抜いているようにしか見えないようで、〝もっと本気でやれ〟くらいの激で済んだ。
ところが、会話の方は違和感だらけだった。
特に監督（綺麗な女性の監督さんだった）に指示されて、
「はい、監督！」
と返事をしたら、何か恐ろしい物を見たような顔をされ、おでこに手を当てられ、
「お前、本当に大丈夫か？」
とまで言われた・・・普段、いったいどういう受け答えしてるの？この人は？
それは、翌日に分かった。

四葉や、サヤちん達に聞いたところ、昨日の私は何を聞かれても、
「あの～」
とか、
「え～」
とか、
「めんどくさ～い。」
等、歯切れの悪い、無気力な言動ばかりだったと・・・・それなら、逆にはきはき答えれば異常に見られるだろう。
あと、人の名前を短縮して後ろに〝チン〟を付けて呼んでいたらしい。確かに私は、サヤちんはそう呼んでるけど、いったい、あの監督を何と呼んでるんだろう？
気が滅入っているところに、松本が声を掛けて来た。
「お・・おい、み・・宮水？」
「はあ～？」
ちょっと落ち込んでいたので、溜息交じりの歯切れの悪い返事になり、目も少し据わっていた。すると・・・
「ひっ、ひいいいいいっ！」
松本は、突然悲鳴を上げて教室を出て行ってしまった。

・・・・あれ？何で？

《 第六話 》

朝起きて、直ぐに体の違和感に気付く・・・・これは、俺の体では無い。部屋も、俺の部屋では無かった。

部屋の姿見で自分の姿を見て、自分が女子になっているのには、流石に驚いた。

「お姉ちゃん・・・あ、今日は早いんやね？」

小学生くらいの女の子が、襖を開けて、部屋を覗いてそう言った。

「ごはんやよ。」

そう言って、階段を降りて行く。

これは、夢だろうか？いや、意識ははっきりとしているし、この感覚は夢では無い。となると、今のこの状況は何だ？

考えられるとすれば、２つ・・・・ひとつは、何かの要因で前世に飛ばされたか、もうひとつは、良くドラマ等であるが、何処かの他人と入れ替ったか・・・・

見たところ、俺の時代とほぼ同じようだから、前世という可能性は低い。やはり、誰かと入れ替っているのだろう。原因は不明だが・・・・

制服に着替えて、下に降りる。居間では、先程の妹とお婆さんが、朝食を食べている。
「おはよう。」
挨拶をして座り、一緒に朝食を食べる。
この入れ代わりが、一時的なものか?継続的なものなのか分からない。今は、この環境に合わせておいた方が無難だろう。
朝食を終え、妹は先に学校に行かせて、俺は部屋に戻る。この女子の持ち物を確認し、できるだけの情報を得る。そして、机の上にあった組紐を持って、また居間に行く。
「お婆ちゃん、お願いがあるんだけど・・・・」
その後、学校に向かい通学路を歩く。住所を見たところ、岐阜県の糸守町というところらしい。かなり山の中の田舎だ、家もそれ程多く無く、人口も少なそうだ。
「三葉〜っ!」
後ろから、自転車に2人乗りした男女が近づいて来る。多分今の俺、〝宮水三葉〟の親友の〝名取早耶香〟と〝勅使河原克彦〟だろう。
「おはよう、三葉。」
「おはよう、サヤちん、テッシー。」
あだ名は、スマホのアドレス帳に書いてあった。
「良かった、今日は普通やね。」

名取が、俺の髪を見て言う。部屋にあった写真では、この三葉という女子は髪を結っていた。やり方は分からなかったが、大概そういうものは親から習うものだ。だから、お婆さんに頼んで結ってもらった。

これで、それ程怪しまれる事は無いだろう。ただ、この地方の方言は真似できない。口数は、できるだけ抑えておいた方が良さそうだ。

学校に行き、しばらくは何事も無かったが、休み時間に、ふと自分を見つめる視線に気付く。何列か横の席の男子が、じっとこちらを見ている。だが、目が合うと、顔を背ける。

「三葉、気にしたらあかんよ。松本の奴、まだこの間の事、根に持っとるみたいやけど。」

彼は、〝松本〟というのか？この間の事とは、何だ？

昼休みは、名取達に誘われて、校庭の隅で昼食を取る。

「ほんまに、今日は、三葉が普通で良かったわ。」

朝も言っていたが、〝今日は普通〟というのは、どういう意味だ？入れ替っていない時の方が、おかしいと言うのか？

「この間の、〝捻り潰すよ〟は酷かったでな。」

何？

「ね・・・ねえ、テッシー？私、いつも、そんな事言ってた？」

「ああ、また、覚えとらんのやろ？1日だけやったけど、何か無気力で、ぬぼ～としとったのに、いきなりキレて〝捻り潰すよ！〟とか言って、怖かったわ。」
「その何日か前は、異様に陽気で、〝○○っス〟の連発やし。」
「〝招き猫〟抱えて、〝ラッキーアイテムなのだよ〟も酷かったな。」
な・・・何だ、それは・・・・まさか、俺だけで無く、紫原や緑間も入れ替っていたのか？
家に帰り、名取達に聞いた内容を整理する。
どうやらこの三葉という女子は、黒子、青峰、緑間、黄瀬、紫原、そして俺の6人と入れ替わっていたという事になる。今のところ、同じ相手と2度入れ替わってはいないようだ。
これは、何を意味するのか？どうにも情報が少なすぎて、皆目見当が付かない。
まあこれで、2度と俺との入れ替わりが無いのであれば、特に気にする必要は無いだろうが・・・・
しかし、多分今、俺の体にはこの三葉という女子が入っているのだろうが、さぞ混乱しているだろう・・・・後のフォローが大変だ。葉山あたりは〝まさか、3人目が出て来たのか？〟とか言いそうかな？

今朝は、京都の洛山高校のバスケ部の寮で目が覚めた。
今日の私は、〝赤司征十郎〟身長はそれ程高く無く、黒子くんと同じくらい。
かなりのイケメンであるが、黄瀬くんとは違う。何か、威厳があるというか、非常に威圧感の高い目をしていて、この目で見つめられて命令されたら、何の抵抗もできずに従ってしまうんじゃないか?そんな事を感じさせる人だ。
でも、いったい、いつまで続くんだろう?この入れ替わりは・・・・いったい、何人の男の子と入れ替ればいいの?・・・・そもそも、何で全員バスケ部なのよっ!
朝食を食べようと食堂に向かっていると、背の高い男の人がこちらに向かって来る。
「おはよう、征ちゃん。今朝は遅いのね?」
「え?」
な・・・何か、おネエっぽいんですけど、何なの?この人?
なんて思いながら、食堂に入って行くと、
「おばちゃん!おかわり!」
何かゴリラのような、黒くてゴツイ男が、物凄い勢いでご飯を食べまくっていた。
テーブルの上には、空の容器が山積にされている。な・・・何て食欲?紫原くん以上?
「また、朝から食べまくって、限度ってもんを知らねえのかよ。」
後ろから声がしたので振り返ると、少し小柄な(と言っても赤司くんよりは大きいが)

陽気そうな男の子が立っていた。

「赤司、主将からも言ってやってくれよ。」

え？赤司くんって、主将なの？だ・・・だって、2年生でしょ？

背の高いおネエの人は〝実渕玲央〟、ゴリラのようなゴツイ人は〝根武谷永吉〟、陽気な彼は〝葉山小太郎〟、3人共バスケ部のメインメンバーで、赤司くん共々、昨年からレギュラーだったらしい。しかも、赤司くんは昨年も主将だったそうだ。多分ここもバスケの名門高なんだろうけど、そんな学校で1年生から主将って・・・・どこまで凄いの？赤司君って・・・・

学校へは、この3人と一緒に行った。名を呼ぶ時に〝くん〟付けで呼んだら、物凄く怪訝そうな顔をされた。いつもは、呼び捨てなんだろうか？

皆、同級生なのだと思っていたら、学校に着いたら、彼らは3年の教室に行ってしまった。

ええ～っ！いくら主将だからって、上級生を呼び捨てなの？も・・・もしかして、凄い独裁者タイプなの？

教室では、ボロを出さないように、できるだけ大人しく無口でいた。元々、気楽に声を掛けられないような、上流貴族のようなオーラを持ってる人だったので、話し掛けて来る人も少なくて助かった。

問題は部活だ・・・・いざ、体育館に集まって、皆の前に立たされたが、何を言って良いのか分からない。バスケ未経験者の私が、強豪高のトッププレーヤーに何を指示できるっていうの？

「え～・・・・今日は・・・・」

皆、黙って真剣に私を見つめている。皆のこの態度を見れば、赤司くんの威圧感の凄さが伝わって来る・・・だから余計に、それを私がぶち壊したら・・・だめ！も・・・もう限界！

「・・・今日は、各自考えて・・・じ・・・自分の・・・に・・・苦手なところを、重点的に練習するように・・・・以上！」

それだけ行って、体育館を飛び出す。皆の間では、ざわめきが起こっている。

「おい、赤司、何処に行く？」

監督と思われる人に呼び止められたが、

「ちょ・・ちょっと体調が悪いんで・・・りょ・・・寮で休んでます！」

そう言って、寮に飛んで帰った。

以降は部屋に籠り、殆ど外には顔を出さなかった・・・・

翌朝、自分の体で目覚め、着替えて居間に行く。

また、昨日何か異常な行動をとって、その事で何か言われるかとビクビクしながら朝

食を食べたが、四葉もお婆ちゃんもいつも通りで、何も変な事は言われなかった。
学校に行く時も、途中サヤちんとテッシーと合流したが、反応は普通だった。
そして、お昼。
「今日も、三葉が普通で良かった～。」
「これが当たり前なんやが、普通な日が続くと、心が落ち着くで。」
普通の日が続いてるって事は、昨日は普通だったって事？昨日は、赤司くんに入れ替わってた筈だけど？
「きっと、三葉、ストレスが溜まってたんやね？お祭りの事とか、町長選挙の事とか、気苦労多いに。」
「それか、やっとお狐様から解放されたか？」
「あんたは、そればっかやな？」
う～ん・・・お狐様じゃ無くて、入れ替わりなんだけど・・・・解放されたのかな？
また、明日になったら、別の男の子に・・・・

《 第七話 》

「あれ?・・・・・」

ここは・・・・確か、三葉さんの部屋・・・・また、同じ夢を見てるのかな?

姿見を見ても、あの時と同じ〝宮水三葉〟さんの姿が映っている。

制服に着替えて、下に降りる。この間と同じように、妹さんとお婆さんが朝食を食べている。

「お姉ちゃん、遅いなあ。」

「来ましたけど。」

「うわっ!い・・・いつの間に?」

この間と、同じ反応だ。

食事をしていると、テレビのニュースが耳に入る。

『１２００年に一度という彗星の来訪が、いよいよ2週間後に迫っています・・・・』

あれ?前の時は、ひと月後だったのに・・・・現実と同じように、時間が経過しているのかな?

朝食を終え、学校に行く。妹さんと別れて、ひとりで歩いていると。また、勅使河原くんと名取さんが、自転車で通り過ぎて行った。

学校に着くと、2人はこの間と同じ会話をしている。近づいても、やはり気付かない。

「三葉、遅いなあ。」

「やっぱ、寝坊しとるんやろ。」

「あの・・・すいません。」

「え?・・・うわっ!」

「み・・・三葉!い・・・いつの間に?」

「さっきから居ましたけど。」

「ええっ?そやった?」

何か、前の夢を再生しているような・・・やはり、夢なのかな?でも、時間経過は?

「おい、名取。」

会話の中に、同じクラスの男の人が割り込んで来た。これは、初めてのパターンだ。

「今日は、宮水は来えへんのか?」

「ここに居ますけど?」

「うわっ!な・・・い・・・いつからそこに居たんや?」

「さっきから居ました。」
「え？・・・ほ・・・ほんまか？」
「はい。」
「な・・・なんや、今日は、随分大人しいんやな？」
「そうですか？」
「な・・・何で敬語なんや？」
「いつもそうですけど。」
　すると、勅使河原くんも含めた全員が、同時に首を振った。
「な・・・何なんや、名取、こ・・・この宮水は？」
「こっちが聞きたいわ。」
「な・・・何か、気が削がれた・・・もう、ええわ・・・・」
　そう言って、その男の人は自分の席に戻って行った。

「ん・・・んんっ・・・・」
　な・・・ま・・また違う男の子の・・・・ん？
　この部屋は、見覚えがある・・・・黒子くんの部屋だ！じ・・・じゃあ、これで1周？も・・・もう、違う男の子になる事は無いの？

考えても答えが出る訳は無いので、私は、とりあえず学校に向かう。でも、一度行っただけなのでよく道を覚えてはいず、少し迷ったのでまた遅刻してしまった。
授業中は相変わらず、クラスメイトの名前は分からず、会話も繋がらない。
今日こそは部活はサボろうと思ったんだけど、また、火神くんに見つかってしまった。
「しかし、不思議だな。」
「え？何が？」
「いや、帰りに黒子を見つけられるなんて、年にそう何度も無いからな。」
何？それ？黒子くんって、保護色でも使って姿隠すの？
部室まで連れて来られ、仕方なくロッカーを開ける。
「?!」
あら、この写真・・・・前は、気付かなかったけど、ここに映ってるのって？
男の子6人と、女の子1人の写真。そこに映っていたのは、黒子くん、青峰くん、緑間くん、黄瀬くん、紫原くん、赤司くん、そして、さつきちゃんだった。
な・・・何？私が入れ替わった6人って、皆、知り合いだったの？学校、全然違うのに・・・・
「ん？何、真剣に見てんだ？・・・・ああ、奇跡の世代揃い踏みの写真か？」
き・・・奇跡の世代？な・・・何なの？それ？

２日後、目が覚めると、そこは、青峰くんの部屋だった。
ま・・・また、青峰くんに・・・・じゃあ、その次は緑間くんで・・・・無限ループなの？
「大ちゃん、いい加減に起きないと、遅刻するよ！」
あれは・・・さつきちゃんの声・・・・私を迎えに来たの？ま・・・待って、このまま一緒に学校に行くと、またお昼に・・・・
私の脳裏に、２週間前の恐怖の昼食の光景が蘇る。
だ・・・だめ、あんな物、２度と食べられない・・・・ど・・・どうすれば・・・・
その時、２日前の、黒子くんのロッカーで見た写真を思い出した。
青峰くんと、黒子くんは知り合い・・・・そ・・・それなら！
私は、青峰くんのスマホの、アドレス帳を検索する・・・・あった！黒子テツヤ！
すかさずコールする・・・・待機音が流れて、直ぐに繋がる。
「も・・・もしもし、く・・・・黒子くん？」
『はい・・・・どうしたんですか？青峰くん？』
「よ・・・・よく聞いて、わ・・私は、青峰やけど、青峰やないの・・・・」
『え？』

焦ってて、自分でも何を言っているのか、よく分かって無い。
「わ・・・私は、み・・・三葉やの！た・・・助けてっ！黒子くん！殺されるっ！」
1時間後、私と黒子くんは、近くの公園で待ち合わせた。私もそうだが、黒子くんは私の事を心配して、学校を休んでくれた。ただ・・・・
「テツく～～～～ん！」
「い・・・痛いです。桃井さん。」
さつきちゃんも、付いて来てしまった。彼女は、会うや否や、黒子くんに抱き付いた。
あれ？さつきちゃんて、青峰くんの彼女じゃ無かったの？
その後、私達は近くのファミレスに入った。
「え～っ？じゃああなた、大ちゃんじゃ無いの？」
「はい、宮水三葉といいます。」
「まさか、2人で私を、からかってるんじゃ無いでしょうね？」
「本当です、桃井さん。僕も、2日前に三葉さんと入れ替わってます。」
「ええっ？テツくんまで？」
その後、私は、2週間の間に黒子くんや青峰くんも含めた、〝奇跡の世代〟と言われる6人とそれぞれ入れ替わった事を説明した。
「ふ～ん、大変だったんだ、三葉ちゃん。」

「ええ。」
「で・・・でも、〝殺される〟は酷く無い？いくら、私が料理が苦手だからって。」
「ご・・・ごめんなさい、つ・・・つい・・・」
私達の会話を聞いて、黒子くんはくすくす笑っている。
「あ～、酷い！テツくん、何笑ってるのよっ！」
「あ・・・す・・すいません。」
「あ？それじゃあ、今、三葉ちゃんの体の中には、大ちゃんが入ってるの？」
「そ・・・そうなるんやね。」
「ま・・・まさか、三葉ちゃんの体で、あんな横暴ぶりを？」
「うん・・・た・・多分・・・・」
「ご・・・ごめんね！三葉ちゃん！」
「い・・・いや、さつきちゃんのせいや無いから・・・・」
「だけど、何故、僕達6人と、三葉さんが入れ替わるんでしょうか？」
「うん、それが、分からんのやけど・・・・」
「前の時は、僕の後が青峰くん、そして、緑間くん、黄瀬くんの順番で入れ替わったんですよね？」
「うん。」

「これから入れ替わる人にも、この事を伝えておいた方がいいですよね？緑間くんと黄瀬くんは近いから、ここに呼んで話しましょう。」
「ほんと？助かる！」
　黒子くんは、緑間くんと黄瀬くんに電話を掛けてくれた。しかし、緑間くんは、〝馬鹿な事を言っているのでは無いのだよ！〟と言って電話を切ってしまった。黄瀬くんの方は、直ぐに飛んで来てくれた。
「ええ～っ？じゃあ今、青峰っちの中に、三葉っちが入ってるんスか？」
　み・・・三葉っちって・・・・
「いや～、でも、糸守いいところっスね！空気はおいしいし、夜は星が凄い綺麗で。」
「そういえば、黄瀬くん、四葉の機嫌を直してくれたんやよね？ありがとう！」
「どういたしまして。俺、末っ子だから、妹って憧れだったんスよ！」
「四葉さんの機嫌って、僕、何かしましたっけ？」
「あ、ううん、黒子くんじゃあらへんよ。」
「きっと、大ちゃんね！」
「緑間っちも、やばいっスね！」
　その後、私達は、入れ替った際にできるだけ周りを混乱させないように、ルールを決めた方がいいという話になった。

「まず、言葉遣いね。三葉ちゃんの時は〝一人称〟は〝私〟と言うこと！」
「方言は、真似できませんが・・・・」
「それは、大丈夫やよ。短い言葉で話せば、それ程違和感無いと思う。」
「でも、テツくんは、敬語で話しちゃダメね。きーちゃんも、〝っス〟は禁止！」
「え～っ？」
「三葉ちゃんは、逆にテツくんときーちゃんの話し方を真似ないと。」
「それは、難しくないっスか？」
「そうですね、６人分の話し方を覚えるのは、大変です。」
「ん～っ、そっかあ・・・」
「あの・・・話し方はがんばるつもりやけど・・・どうにもならない問題が・・・・」
「え？何？」
「・・・バスケ・・・・」
『あ～！』
３人共、相槌をうつ。
まさか毎回サボる訳にもいかないので、この３人に入れ替った時は、さつきちゃんに電話をすれば、さりげなくサポートしてくれる事になった。
「緑間っちは、どうすんスか？取り合ってくんなかったでしょ？」

「それも、私が何とかする。同じ東京だし。」
「じゃあ、紫原っちは？」
「ん～っ、ムッくんかあ？」
「氷室さんに、相談したらどうでしょうか？」
「うん、いいわ、それよ！テツくん！」
「ああ、あの人なら、柔軟に対応してくれそうっスね。」
「じゃあ、残るは赤司くんね。」
「本人に聞いてみましょう。」
そう言って、黒子くんは躊躇せず赤司くんに電話をする。
黒子くんって、大人しそうなのに、行動は大胆なのね・・・・
説明に時間が掛かるかと思ったんだけど、赤司くんの対応は、
『そうか、やはりお前達も入れ替わっていたか。』
「気付いていたんですか？」
『ああ。入れ替わりの理由までは分からないがね。』
え？赤司くん、たった1回の入れ替わりで、もう入れ替わりに気付いていたの？それも、他の5人が入れ替わってた事まで・・・・す・・凄い、1年生で名門校の主将を務めるだけの事はある。

『俺と入れ替った時の事は、心配する必要は無い。言葉遣いだけ気を付けてくれれば、部員の練習メニューはあらかじめ用意しておく。あとは、指導しているふりをしていればいい。』

な・・・何て、頼りになる人なの?流石、奇跡の世代を束ねるリーダー。

『それよりも、入れ替っていて、何か気付いた事は無いか?』

「え?僕は、特に何も・・・・」

『そうか?緑間の次は、黄瀬の番だと言ったな。何でもいい、気付いた事を、入れ替った翌日に俺に連絡するように言ってくれ。』

「はい、分かりました。」

良かった、これで、入れ替わっても混乱は少なくて済みそう・・・でも、本当に、何でこんな入れ替りが起こるんだろう?・・・・

《 第八話 》

青峰くんと入れ替わった2日後、また緑間くんと入れ替わり、その2日後に黄瀬くんと入れ替わった。その日は日曜だったので、さつきちゃんに連絡を取り、また皆でこの間のファミレスに集まった。参加者は、私（黄瀬くん）、さつきちゃん、青峰くん、黒子くんの4人だ。

「はあ・・・・・」

会ってそうそう、私は溜息をついた。

「疲れてるみたいね？大丈夫、三葉ちゃん？」

「ま・・・また四葉が怒っちゃって、宥めるのに、大変で・・・・」

「大ちゃん、また、酷い事言ったんでしょ！」

「仕方ねえだろうが！入れ替わってるなんて、知らなかったんだしよ。」

「でも、周りの状況が違うんだから、少しは空気読みなさいよ！」

「俺ばっか責めるんじゃねえよ！緑間だって、怒らせたんだろ？あいつは、何で来ねーんだよ？」

「はい、〝入れ替わりの事は理解したが、会って話してどうにかなる事では無いのだよ。〟だそうです。」
「もう、ミドリンたらっ！」
「バスケ部や、運動部の勧誘も厳しくて・・・・」
「大ちゃん、少しは自重しなさいよ！」
「あのチャラ男のせいだろうが、やたらと突っ掛って来やがって・・・・そういや、あいつどうした？この間は、姿見なかったが。」
「ああ、松本・・・最近、えらく落ち込んでて、休む日が多いんよ。」
「緑間や、紫原にもやられたんだって？いい気味だ。」
「青峰くん、入れ替わってた時に、何か気付いた事無いですか？」
「はあ？・・・・ド田舎で、遊ぶとこもねえなって事くらいしかねえが・・・・何で、そんな事聞くんだよ？」
「赤司くんが、何でもいいから、気付いた事を連絡しろって。」
「テツは、何かねえのかよ？」
「ひとつ、思い出した事があるんですが・・・」
「何だよ？」
「彗星です。」

『彗星?』

3人でハモった。

翌日、僕は赤司くんに皆で話した事を連絡した。

『そうか?確かに、彗星接近なんてニュースは聞かないな。ありがとう、次に自分が入れ替わる時に、それも確認しておこう。』

「はい、お願いします。それで、黄瀬くんからは何かありましたか?」

『残念ながら、何も無いな。普通に学校に行って、帰って来ただけだそうだ。』

「え?日曜日に、学校に行ったんですか?」

『ん?そうか、確かに、昨日は日曜だ・・・・少し待ってくれ、黄瀬にもう一度確認する。』

食い違うニュース、曜日の違い・・・・これは、もしかすると・・・・

しばらく待つと、赤司くんから、もう一度電話が掛かって来た。

『もしもし、黒子か?黄瀬に確認した。曜日までは分からないそうだが、普通に授業があったそうだ。だから、日曜日では無い。』

「じ・・・じゃあ・・・」

『そうだ、時系列がずれている。』

翌日、私は、教室の窓にもたれ掛って、昨日黒子くん達と話したことについて考えていた。

彗星最接近のニュースは、こちらでは週に2～3回は流れている。それが、東京では全く流れないなんておかしい。だいたい、新聞にだって出てる。まさか、黒子くん達の世界と、私の世界が別世界なんて事は無いよね？

「お～い！宮水～っ！」

廊下から、隣のクラスの男子が声を掛けて来た。この間、バスケの名門校について聞いた、バスケ部の男子だ。

「何？」

彼に歩み寄って、私は尋ねる。

「お前って、本当にバスケ好きなんやな？中坊までチェックしとるなんてよ。」

「え？・・・何の事？」

「とぼけるなや、〝奇跡の世代〟の事や！」

「え？奇跡の世代？」

「週刊誌にも載っとったで、この記事！」

そう言って彼は、週刊誌の記事を見せてくれた。そこには、帝光中学バスケ部の〝奇跡の世代〟と呼ばれる、中学生プレイヤーの事が書かれていた。

レギュラーの5人全てが、〝10年に1人〟の逸材であり、彼らが入部して以降、帝光中学は一度も負けていない・・・その名前は、〝赤司征十郎〟、〝緑間真太郎〟、〝青峰大輝〟、〝黄瀬涼太〟、〝紫原敦〟・・・・あれ？黒子くんの名前が、無い・・・・

ま・・・待って、この子達って・・・・中学2年生？じ・・・じゃあ・・・・私と黒子くん達の時間は・・・・3年ずれていたの？

「そういえば、この奇跡の世代やけど、奇妙な噂も流れとるらしいで。」

「え？ど・・・どんな？」

「何でも、誰も知らへんらしいけど、この5人の他に、5人が一目おいとる〝幻の6人目〟がおるって噂がな。」

ま・・・幻の6人目？・・・・・まさか、それが、黒子くん？

数日後、赤司は、三葉の体で目を覚ます・・・・

目覚めた後、俺は、真っ先にスマホを確認した。

〝2013年〟

間違い無い、俺達の時間の、3年前だ。迂闊だったな、スマホの画面は何度も見ていたのに、年号の違いに目が行かなかった。

3年の時差がある事は分かった。だが、それと入れ替わりがどう関係しているのか？

それを調べるには、学校に行っている場合じゃ無いな。
その日は学校を休むつもりで、私服に着替えて下に降りる。
「おはよう、お姉ちゃん。お婆ちゃんが、朝ごはん食べたら、直ぐ出掛けるやて。」
「え?・・・何処に?」
今日は、山の上にある御神体に、口噛み酒とやらを奉納する日らしい。
そんな事をやっている場合では無いのかもしれないが、〝御神体〟という言葉が、どうも引っ掛かった。この入れ替わりの現状は、実際に神懸かりな出来事だ。その〝御神体〟とやらが無関係には思えなかった。
俺と四葉、お婆さんの3人で出かける。宮水神社の、裏手の山を登って行くようだ。
御神体が神社にでは無く、山の上にある事にも、何か意味があるのかもしれない。普通なら、神社の中か、そうでなくても直ぐ側に置く筈だ。
結構な山道を、ひたすら歩く。まだまだ、先は長そうだが、お婆さんには、この山道は辛いだろう。非常に、歩みも遅い。これでは、いつ御神体に辿り着けるか分からない・・・・
「お婆ちゃん!」
俺は、お婆さんに背中を差し出す。婆さんは、にっこり笑って、
「ありがとうよ。」

と言って、俺の背中におぶさる。

山頂までの道中、俺の背で、お婆さんが日本古来の〝ムスビ〟の事を語った。

糸を繋げることも、人を繋げることも、時間が流れることも、全部同じ言葉〝ムスビ〟を使う。それは神様の呼び名であり、神様の力でもあると。では、俺達と三葉の入れ替わりも、何かの〝ムスビ〟なのか？・・・・

ようやく頂上に着くと、そこには、大きなカルデラ状の窪地があった。その中央には、巨大な岩と一体化した巨木があり、それが御神体らしい。

これが御神体なら、神社と場所が離れているのも分かるような気がする。こんな場所に神社を建てても、通うのが大変だ。逆にこんな物を、町の近くまで運ぶのも困難だ。

俺達は、その御神体を囲むように流れる、小川の前まで行く。

「ここから先は、隠り世。」

お婆さんが、また語る。この先はあの世、つまりは死後の世界であり、戻るには、俺達の一番大切なものを、引き換えにしなければならないらしい・・・・その一番大切なものが、口噛み酒なのだと・・・・この酒は、三葉と四葉が米を噛み、唾液と共に吐き出したものらしい。これが、三葉達の半分なのだそうだ・・・・

御神体の前まで行くと、小さな入り口があり、下に降りる階段が付いていた。中まで降りて行くと、小さな祠があり、口噛み酒はそこに奉納された。

御神体を出て、山を降りると、もう陽が雲の後ろに隠れ掛かっていた。
「もう、カタワレ時やなあ・・・・」
お婆さんが呟く。カタワレ時とは何だ？聞いた事が無い。だが、入れ替わりとは関係は無さそうだ。
わざわざここまで来てみたが、結局何も分からなかった。
「もう、彗星見えるかな？」
四葉が、そう言う。
彗星・・・・そうだな、彗星について調べれば、何か分かるかもしれない・・・・
考え込んでいる俺に、お婆さんが横から声を掛ける。
「あんた今、夢を見とるな・・・・」
いや、これは夢では無いよ、お婆さん。

１０月４日、自分の体で目が覚める。この間、赤司君と入れ替わって以降、入れ替わりは起こっていない。今日が、彗星が最接近する日。黄瀬くん辺りは、今日ここで、その天体ショーを見たかったんじゃないかな？あ・・・でも、向こうでも、３年前に見てるんだっけか？
夜、祭りもあるので、浴衣に着替えて、サヤちんとテッシーとの待ち合わせ場所に行

く。

「遅くなってごめん。待った?」

「ううん、私らも、今来たとこやよ。」

「ほんじゃ、行こか!」

3人で、神社に向かって歩く。空には、彗星が大きな尾を引いて、巨大な紐のような模様を描いている。それはまるで、夢の景色のように、ただひたすらに美しい眺めだった。

「あれ?」

ふと、私は気付く。彗星の描く紐が、2つに分かれているのに。その間隔はどんどん広がっていき、その片方は、赤く大きな塊になっていく・・・・

《 第九話 》

もう1週間くらい、三葉さんとの入れ替わりが無い。この間は赤司くんだったので、もし入れ替るのなら僕の番なんだけど・・・・もう、入れ替わりは無くなったのかな？入れ替わりの理由について、赤司くんは、何か分かったのだろうか？

桃井さんも、心配してよく電話を掛けて来る。赤司くんの話では、僕達と三葉さんの時間は3年ずれているらしい。だから、入れ替らない限り、僕達が三葉さんと連絡を取る術は無い。この時間の三葉さんには、いくら連絡しても繋がらない。多分、スマホのアドレスが変わっているのだろう。

その時、スマホの着信音が鳴った・・・・赤司くんからだ。

『黒子か？直ぐに、青峰と黄瀬に連絡して欲しい、桃井にもだ。』

「え？何をですか？」

『大変な事が分かった。詳しくは会ってから話すが、次の日曜日、昼までに岐阜県の飛騨古川駅まで来て欲しい。』

「な・・・何故ですか？」

『それは会ってから話す。俺達、全員に関わる話だ。緑間と紫原には、俺から連絡しておく。』

「は・・・はい、分かりました。」

赤司くんに言われた通り、青峰くん、桃井さん、黄瀬くんに連絡して、次の日曜日、僕達は飛騨古川に向かう電車の中に居た。

「で、赤司は何にも言わねえのかよ?」

「はい、会ってから話すって。」

「勿体つけやがって、用件くらい言えってんだ!」

「きっと、三葉っちの事っスよ。赤司っち、入れ替わりの後も調べてたみたいだし。」

「心配よね?何で、急に入れ替らなくなっちゃったのかしら?」

「お前は、入れ替らないからいいかもしれねえが、結構大変なんだぞ!あれ!」

「俺は、楽しかったっスけどね。」

「お気楽でいいな、てめえは・・・・」

飛騨古川駅に着くと、改札口の前で既に、赤司くん、緑間くん、紫原くんの3人が待っていた。

「あれ、紫原っち早いっスねえ?一番遠くなのに。」

「昨日の内に来させて、洛山の寮に泊まらせた。寝坊されては困るからね。」

「流石、抜かり無いわね、赤司くん。」
「そんな事より、こんなとこまで呼んで何の用だ？赤司？」
「百聞は一見にしかずだ。一緒に付いて来てくれ。」
「はあ？何処に行くんだよ？」
「糸守だ！」
『ええ～っ？』
飛騨古川駅から、タクシー2台で移動する。電車やバスは無いのかと聞いたところ、以前は走っていたが、今は廃線との事・・・・どういう事だろう？
タクシーで1時間弱、廃校となった学校の前で降りる。その学校名を見て、僕達は愕然とする。
〝糸守高校〟
「な・・・何で廃校になってるんだよ？3年で、そんなに過疎化が進んだってのか？」
赤司くんは、どんどん先を歩いて校庭の方へ行ってしまう。僕達も、慌ててその後を追う。
校庭の端、勅使川原くんや名取さんと昼食を取っていた辺りに行き、町を見渡して、更に僕達は驚愕する。
「な・・・何だよ？これは？」

「ひ・・・酷い・・・・」

そこに、町は無かった。糸守湖は、元の円にもうひとつ大きな円が重なった、瓢箪状に姿を変え、湖畔の町は、全て瓦礫の山と化していた。三葉さんの家や、宮水神社のあった所は、新しい円の中心辺りだ。その辺りは、町がごっそり無くなっている。

「な・・・何なんスか?これは?」

「ティアマト彗星だ。」

『え?』

僕たちの問いに、赤司くんが答える。

「黒子が言っていた、3年前に地球に最接近した彗星だ。その最接近の際に一部が分裂して、破片が日本に墜ちた。その墜ちた場所が、この糸守だ。」

「何だと?」

「そ・・・そういえば、確かに、3年前にそんなニュースあったっス。」

「町は壊滅、住民の約1／3が巻き込まれて亡くなったそうだ。」

「じ・・・じゃあ、三葉ちゃんも?」

「その1／3に含まれている。」

「そ・・・そんな・・・・」

「本当に迂闊だった・・・彗星の話を聞いた時に、思い出せば・・・いや、直ぐに調べ

れば良かったんだ・・・・済まない・・・・」
「もしかして・・・・あの入れ替わりは、この事を僕達が三葉さんや糸守の人に伝えて、皆を避難させるために・・・・」
「そう考えて、間違い無いだろう。」
「じゃあ俺達は、その期待に応えられなかったって事か？」
「そんな・・・三葉ちゃん・・・・」
とうとう、桃井さんは泣き出してしまった。他の皆も、唇を噛み締めている。
「も・・・もう、どうにもならないんスか？」
「入れ替わりは、もう無くなった・・・・万事休すなのだよ。」
「いや、まだ可能性は残されている。」
「何？」
全員が、赤司くんに顔を向ける。
「本当か？赤司？」
「ああ、皆を呼んだ、本当の理由はそれだ！・・・付いて来てくれ。」
そう言って、赤司くんはタクシーのところに戻る。僕達は、それに続く。
タクシーは、糸守の廃墟を迂回して、糸守高校と湖を挟んで反対側の山道に入る。かなりの悪路を進み、それ以上は車で移動でき無くなる所まで行く。そこからは歩きで、

山を登って行く。頂上に付くと、そこはカルデラ状の窪地で、真ん中に岩と一体化した巨木が立っている。

「あれが、宮水神社の御神体だ。」

『御神体?』

「あの岩の裂け目から、下に降りられる。そこまで行くんだ。」

僕達は、赤司くんに続いて歩いて行く。御神体を囲むような円状の小川を渡り、岩の裂け目から、御神体の中に入る。そこには、小さな祠があり、瓶子が2つ供えられていた。

「これは、口噛み酒といって、糸守に古くから伝わるお神酒だ。三葉と四葉の姉妹が、米を噛み、吐き出して瓶子に入れた物だ。」

「噛んで吐き出した?おえ・・・・」

「ちょっと、失礼だよ!大ちゃん!」

「供えたのは俺だ。最後に、三葉と入れ替わった時にね。左が三葉の物、右が四葉の物だ。俺が供えたのは1週間程前だが、ここでは3年経っている。もう発酵して、お酒になっているだろう。」

「それで、これが何なのだよ?」

「あの日、お婆さんが語ってくれた。糸を繋げることも、人を繋げることも、時間が流れ

ることも、全部同じ言葉〝ムスビ〟を使う。それは神様の呼び名であり、神様の力でもあると。俺達と三葉の入れ替わりも、何かの〝ムスビ〟だろう。入れ替わりが無くなったのは、それが強制的に切られたからだ、彗星の破片の落下によってね。」

『・・・・・』

皆、真剣に、赤司くんの話に聞き入っている。

「もうひとつ、お婆さんが言っていた。この口噛み酒は、三葉と四葉の半分・・・2人の分身のような物だと・・・・だとすれば、これを飲む事により、もう一度俺達と三葉を〝むすぶ〟事ができるかもしれない。」

『?!』

皆、この言葉に衝撃を受ける。

しばしの沈黙の後、僕は、三葉さんの口噛み酒の入った瓶子に手を伸ばす。

「じゃあ、これを飲めば、もう一度三葉さんと入れ替われるんですね?」

「絶対では無い。その可能性がある、というだけだ。」

「ま・・・まさか?飲む気か、テツ?」

「はい、だって、これじゃ、三葉さんが可哀想すぎます・・・・本来なら、僕達は、三葉さんを助けなきゃいけなかった・・・それが、彗星の破片落下に気付く事もできなかったなんて・・・・このままじゃ、悔いが残ります!」

「ん～、まあ、そうだけどよ・・・・」
「気付いてても、青峰っちじゃ救えなかっただろうっスけどね。」
「うるせえ！一言多いんだよ、てめえは！」
僕は、瓶子の蓋を開け、その蓋に中の口噛み酒を注ぐ。
「待て、黒子。」
僕が、蓋を口に近づけようとしたところを、赤司くんが制止する。
「お前ひとりでは大変だろう、俺も一緒に行く。」
そう言って、赤司くんは、もうひとつの瓶子を手に取る。
「ちょっと待って、赤司っち、それは・・・・」
「三葉の妹、四葉の口噛み酒だ。」
「あの、ガキと入れ替るつもりか？」
「仕方が無いだろう。口噛み酒は、この2つしか無いんだ。人口が少ないとはいえ、１５００人を避難させるんだ。人手は、ひとりでも多い方がいい。」
「ありがとうございます。お願いします、赤司くん。」
「ちょっと待て、テツ！」
「はい？」
今度は、青峰くんが僕を制止する。

「お前じゃ不安だ、俺が代わる！」
『え～っ？』
　周りの皆が、驚きの声を上げる。
「お前じゃ、影が薄くて、皆が気付いてくれないと困る。その点、俺なら目立つ！」
「それなら、俺の方が目立つっスよ！俺が行くっス！」
「でしゃばんな、引っ込んでろよ、黄瀬！」
「なんでっスか？俺だって、三葉っち助けたいっスよ！」
「待て、どうもお前達は遊び半分に思えていかん。俺が行くのだよ。」
「え～っ？何言ってんスか、緑間っち？」
「だいたいてめえは、全然非協力的だったじゃねえか？」
「何にも分からない状態で、議論しても無駄だと思っただけなのだよ。目的がはっきりしているなら、ここは副主将の俺が適任なのだよ。」
「そんなの中学時代の話だろ！今は関係ねえ！」
「そうっスよ！」
　3人で、口論を始めてしまった。
「ムッくんは参加しないの？」
「だって～、めんどくさいし～」

しかし、3人共全く譲らないので、いつまで経っても決着はつかない。
「俺だ！」
「俺っスよ！」
「俺なのだよ！」
「あ～もう、ストップ！」
痺れを切らして、桃井さんが口を挟む。
「それなら、三葉ちゃんに選んでもらいましょ！」
「え？」
「いねえ奴が、どうやって選ぶんだよ？」
「だから～・・・・」
そう言って、どこから出したのか、桃井さんは、お猪口を4つ取り出す。それぞれに三葉さんの口噛み酒を注いで、青峰くん達にひとつずつ渡す。
「これで、皆で飲むの！」
「はあ？」
「そんな事したって、入れ替れるのはひとりっスよ？」
「そう、きっと、一番三葉ちゃんと〝むすばれてる〟人が入れ替るわ！」
「何で、俺まで～？めんどくさいんだけど～」

「文句言わないの！さあ、飲んでっ！」
　そこで、じっと待っていた赤司くんが、ようやく口を開く。
「話は決まったようだね・・・・桃井、うまくいけば、三葉と四葉が入れ替ってここに来る筈だ。多分混乱するだろうから、君が説明してあげてくれ。」
「は・・はい！」
「では、皆、行くぞ！」
「はい！」
「おうよ！」
「いいっスよ！」
「いいのだよ！」
「めんどくさいのに～」
　全員で、口噛み酒を一気に飲み干す。
「何だ？この変な味は？」
「まず～い！」
「いまいちっスねえ。」
　皆、文句が多い・・・・
　しばらくすると、徐々に意識が遠のいていく・・・・こ・・これは？・・・・

《 第十話 》

「・・・・んっ?」
目が覚めて、慌てて飛び起きて、部屋を見渡す・・・・三葉さんの部屋だ!
自分の体を見る・・・・女物のパジャマで、胸も有る・・・まだ生きている時間で、入れ替われたんだ!
「・・・・黒子か?」
気が付くと、右の襖が開いていて、四葉さんが立っている。
「あ・・・赤司くん、ですか?」
「そうだ。」
僕は、ある衝動を抑えようと、必死にお腹を抑える。
「く・・・・くく・・・・」
申し訳無いけど、それでも、抑えきれない・・・・
「笑うなよ・・・・自分でも、滑稽だと思っている。」
着替えて、一緒に居間に降りる。テレビが付いていて、ニュースが流れている。

『いよいよ、今夜、ティアマト彗星が地球に最接近します・・・・・』
「墜落の当日に来たようだな・・・・だが、まだ時間はある。」
「はい。」
そこに、お婆さんが入って来る。お婆さんは、僕達を見るや否や、こう言った。
「あんた達・・・三葉と、四葉やないね。」
「え？分かるんですか？」
「どうやら、入れ替わりは、宮水家に代々引き継がれている力のようだな・・・」
その後、お婆さんに僕達の事を話し、今夜彗星の破片が糸守に墜ちる事を説明したけど、お婆さんは〝そんな事を言っても、誰も信じ無い〟と言うだけだった。
僕と四葉（赤司くん）は、とりあえず学校に向かっていた。
「どうやって、皆を避難させますか？」
「お婆さんの言うように、普通に話しても信じてはもらえないだろう。何か、偽の災害でも起こして避難させるか・・・・」
その時、後ろから声が聞こえて来る。
「黒子っち～！赤司っち～！」
振り向くと、名取さんがこちらに向かって走って来る。でも、この呼び方は・・・・
「ふう・・・や・・やっと追い付いた。」

前屈みになって息を整えている名取さんに、四葉が尋ねる。
「お前？・・・・黄瀬か？」
「な・・・何で、黄瀬くんが、名取さんに？」
「知らないっスよ、目が覚めたら、この娘になってたんス！」
「ほう？これは、もしかすると・・・・」
「でも、よく三葉さんと入れ替わってるのが、僕だって分かりましたね？」
「そんなの、歩き方見りゃ分かるっスよ！あと、ちょっと認識し辛かったっスから。」
すると、更に後ろから、勅使河原くんが歩いて来る。何故か、袋ごとの〝まいう棒〟を抱え、ひとつは食べながら・・・・
「おはよ～～～」
「紫原か？」
「まさか、みんな誰かに入れ替わってるんですか？」
「ええっ？じゃあ、青峰っちと、緑間っちは？」
そんな話をしていると、今度は、前からこちらに向かって来る人影が・・・・あれは、確か松本くん？
「よう、三葉に入ってんのは、テツか？」
「あ・・青峰っちスか？」

「ったく・・・何で俺が、このチャラ男なんだよ?」
「やはり、全員、この糸守に来ているようだな?」
「で・・・でも、緑間っちは?」
「その内現れるだろう。皆、三葉の所に集まっていると、思うだろうからね。」
その後、僕達は町営駐車場の前に差し掛かる。駐車場では、また、三葉さんのお父さんが、選挙演説をしようとしていた。ところが、僕達が通り掛かると、それを止めて僕達に歩み寄って来る。それを見て、四葉が声を掛ける。
「・・・緑間か?」
「何で・・・俺だけおっさんなのだよ?」
『ぷっ!』
松本くん(青峰くん)と、名取さん(黄瀬くん)は思わず吹き出してしまう。僕は、流石にこれは笑えなかった。
「そうか、これは好都合・・・・いや、そうか!そういう事か?」
何だか知らないが、四葉は、ひとりで納得している。
「皆、学校に行くのは止めだ!緑間、町長室を貸し切ってくれ!」
四葉の指示で、僕達は、糸守町役場に向かった。

「んっ・・んんっ・・・」
な・・・何か、背中が痛い・・・石の上にでも寝ているような・・・周りも暗くて・・・・
少しずつ目を開いていくと・・・あれ?誰かが私の顔を、覗き込んで・・・・
「さ・・・さつきちゃん?」
「・・・やっぱり、テツくんと入れ替わったのね・・・ちょっと、妬けちゃうな。」
「え?」
気付くと、黒子くんの体だった。私、また入れ替わったの?え?でも、ここって・・・・
そこは、御神体の中だった。
「きゃあああっ!何なん、これ?」
突然の悲鳴に、驚いてそちらを向くと、そこには赤司くんの姿が。え?でも、今の喋り方って・・・・
「うわっ!何やこれ?」
「ええっ!どうなってんの?」
「な・・・何だ?これは?」
「何なんや?これ・・・・」
更に、後ろからも悲鳴が・・・・振り向くと、青峰くん、黄瀬くん、緑間くん、紫原くんが・・・・でも、皆、喋り方が・・・・

「ええっ?ど・・・どうして、大ちゃん達まで?」
さつきちゃんまで驚いてる・・・どうなってんの?

僕達は、町長室を貸し切って、避難計画について話し合っていた。
「で、どうする気なんだよ!赤司!」
「3年後で見て来た通り、糸守高校は無事だった。だから、破片の落下時に、住民全員が糸守高校に居るようにさせればいい。」
「どうやって、避難させるんスか?」
「避難させるのでは無く、集めればいい。例えばだが、今夜、糸守高校で〝レディーガガ〟がコンサートを開くと聞いたら、住民達はどうする?」
「それは、見に行くでしょうね。」
「そうだ、別にファンで無くても、その名前を知っていれば、興味本意で人は集まる。滅多に有名人の来ない、こんな田舎町なら尚更だ。」
「だけどよ、必ず全員来るとは限らねえぞ。全く、興味無い奴だっているだろ。」
「だから、それを町の行事に組み込む。幸い、今夜はお祭りだそうだ。半ば強制的に、全住民を糸守高校に集める。」
「できんのかよ、そんな事が?」

「できる！町長の権限を使えばな！」
『あ？』
皆、一斉に、町長に入れ替わっている緑間くんの方を向く。
「緑間が、町長と入れ替わったのも偶然では無いだろう。俺達６人が三葉と入れ替わり始めた時から、仕組まれた運命だったのさ。」
「待って下さい、赤司くん。いくら何でも、僕達で〝レディーガガ〟を糸守に呼ぶ事はできません。」
「ああ、それは単なる例えだ。俺達が呼ぶのは、別な者達だ。もちろん、今日の内にここまで来れる人間だ。」
「いったい、誰を呼ぶ気なんスか？」
「帝光中学、バスケットボール部・・・・奇跡の世代だ！」
『な・・・何～っ？』
「糸守高校で、帝光中学とバスケの親善試合をするんだ！」
「ばか言ってんじゃねえぞ、こんな弱小高のバスケ部が、いくら中学時代とはいえ俺達の相手になる訳ねえだろ！」
「相手をするのは、糸守高校バスケ部では無い！」
「ま・・・まさか？」

「そうだ、俺達が闘うんだ！３年前の自分達と！」
「す・・・すげえ・・・奇跡の世代ＶＳ奇跡の世代っスか？」
「待て、赤司。お前は、帝光中学が親善試合に応じる前提で話をしているが、こんな田舎の無名校との親善試合を、帝光が受けるとは到底思えないのだよ。」
「いや、必ず受けるね。」
「何故だ？」
「あの当時の、俺達を思い出してみろ。練習試合も、公式戦も、満足のいく相手が居たか？どの試合も、不完全燃焼の連続で、事務的にこなしているだけでは無かったか？」
「そ・・・それは、そうだが・・・・」
「お前はどうだ？青峰？お前が一番、強敵に飢えていたんじゃないのか？」
「まあ、そうだな・・・〝俺に勝てるのは、俺だけだ〟なんて、言ってたな。」
「そのお前が、お前の相手をしてやるんだ。受けない筈が無い！」
「じゃあ、僕達の正体を教えるんですか？」
「全員に話したところで、信じはしないだろう。だが、俺ならば、〝赤司征十郎〟なら信じる。」
「ふっ、そうか・・・そう言われると、何か燃えて来たぜ！」
「腕がなるっスね！」

「めんどくさいけど、面白そうかも～」
「分かった、人事を尽くすのだよ。」
「しかし、3年前の俺達なんだろ、スキルもまだ未熟な頃だ、逆に俺達の相手になんのか？」
「侮るなよ、スキルが上でも、こっちは慣れない他人の体だ。身体能力も、圧倒的に低い。下手をすれば、一蹴されるのはこっちの方だ！」
「そんな事言ってるが、目が自身満々じゃねえのか？」
「まあ、やるからには、負けるつもりは毛頭無い。ただ、この試合のキーマンは、俺達じゃない。」
「はあ？」
「黒子、お前だ！」
「え？」
　四葉が言う事の意味を、この時は、僕はまだ理解できなかった。
「俺と緑間は、ここに残って色々な手続きを進める。お前達は、糸守高校に行って、親善試合の準備を進めてくれ。」
「でも、学校が許可してくれるでしょうか？」
「糸守町長の要請だと言えば、大丈夫だろう。後で、緑間に電話させる。」

「バスケ部の方はどうすんだ？俺はいいとして、部外者や女やおっさんが選手として出るのを、すんなり認めるとは思えねえ。」
「それは、お前と黒子で説得してくれ。特に、三葉は糸守ではスーパープレーヤーだ。その三葉が頼めば、何とかなるだろう。」
「そんな、うまく行くかね？」
「それで無理なら、多少のアピールはやってもいい。」
「ほんとっスか？」
「ああ、今の体での、ウォーミングアップもしておいた方がいいだろうからな。」
「あ～あ、めんどくさいのに～」
「あ、それから・・・」
「まだあんのかよ？」
「以後は、人前では本名を呼ばないように。周りが混乱する。俺は〝四葉〟、黒子は〝三葉〟、青峰は〝松本〟、黄瀬は〝サヤちん〟、紫原は〝テッシー〟と呼ぶんだ。」
『え～っ？』
「赤司、俺は？」
「〝お父さん〟に決まってるだろ？」
『ぷっ！』

また、松本くんと名取さん、勅使河原くんも一緒に噴き出した。申し訳ないけど、僕も・・・・

三葉達が出て行った後、町長室で・・・・

「赤司、ちょっと聞いていいか？」

「何？お父さん？」

「２人の時はやめろ！」

「悪かった、冗談だ。」

「お前はさっき、〝赤司征十郎なら必ず信じる〟と言ったが、そこまで言い切れる根拠は何だ？常識的に考えて、未来の自分が他人に入れ替わってる等、普通信じないのだよ。」

「ふふ、もうひとりの俺を覚えているか？」

「ああ。」

「この時間の俺を支配しているのは、もうひとりの俺だ。自分が負ける事など、絶対に有り得ないと驕り高ぶっていた頃のな。そんな俺でも、一目おいていた者が居た。本当は優劣を付けたいが、闘いたくともそれが叶わない相手・・・・」

「それが、今のお前だと言うのか？」

「そうだ。だから、そこを突けば必ず食い付いて来る。信じ難い、突拍子も無い話でもな。」

私達は、さつきちゃんに言われて、山の頂上の縁に上がった。
「え？」
「な・・・なんやの？これ？」
「ば・・・ばかな？」
皆、その光景に驚嘆の声を上げる。そこに、私達が知っている糸守は無かった。瓢箪型に姿を変えた糸守湖と、その周りに広がる、瓦礫の山があるだけだった。
「さっき言ったように、3年前に彗星の破片が墜ちて、糸守はこうなってしまったの。」
「わ・・・私達は、死んだの？じゃあ、な・・・何で、今ここに？」
「あなた達の、口噛み酒を飲んで・・・・テツくん達が入れ替わったの。皆は今、破片が墜ちる前の糸守に行っている・・・・三葉ちゃん達を、助けるために。」
「わ・・・私達のために？・・・・・く・・黒子くん達が？」
「し・・・しかし、どうやって助けるんだ？こんな事、実際に見なければ、誰も信じないだろう？」
「それは、私にも分かりません。でも、テツくん達は、絶対に糸守を見捨てない！必ず助けます！」
そうだ、今は、黒子くん達を信じるしかない・・・・お願い！がんばって、黒子くん

!

《 第十一話 》

今夜、糸守では豊穣祭が開催される。通常なら、祭典は宮水神社で行われ、神社の境内に出店が並ぶ。ところが、今年は祭典は糸守高校で行われ、糸守高校の校庭に出店が並ぶ。そして、祭典の目玉は、１９：３０より糸森高校体育館で行われる、帝光中学バスケットボール部と糸守選抜チームによる親善試合である。

いくら糸守町長の勅命とはいえ、祭典当日にこのような大幅な企画変更は普通通らない。何より、神社側が承諾する筈が無い。しかし、三葉達の素性を知っている、宮水神社神主でもある一葉が、難色を示す町の長老達を説得してくれたおかげで実現できた。逆に若者達は、週刊誌でも騒がれている〝奇跡の世代〟が見られると、喜び勇んで糸守高校に集まって来た。

夕方になって、糸守高校の校庭には出店が並び、大勢の人々が集まっている。空には既に彗星が大きな尾を引いて、綺麗な模様を描いている。住民達は、それも眺めながら楽しんでいる。

本祭りは講堂で行われる。そちらのしきりは、神主である一葉が行っており、三葉達

は体育館で親善試合の準備を行っていた。
そこに、四葉（赤司）がようやく到着する。
「あか・・・四葉・・・」
「何とか、説得はできたみたいだね？」
「はい、結局、最後はサヤちんとテッシーが、バスケ部員を一蹴する事になりましたけど。」
「じゃあ、もうウォーミングアップは済んでいるな？」
「帝光中学とは、話はつきましたか？」
「大丈夫だ。もうそろそろ着く頃だろうから、出迎えの準備をしよう。」
「みど・・・お父さんは？」
「もう直ぐ来る。出迎えには、やはり町長が居ないと失礼だからね。」
体育館を出ると、丁度バスが学校内に入って来た。帝光中学の、遠征用のバスだ。
町中の人達がバスを囲み、体育館まで人混みの花道が出来上がる。そして、バスから選手達が降りて来ると、大きな歓声と拍手が沸き起こる。
糸守町長の宮水としき（緑間）が、先頭に立って帝光中学の選手達を迎える。引率者である真田監督と握手を交わす。
「今夜は、突然の要請に応えて頂いた上、遠い所からお越し頂き真にありがとうございま

す。」
「いえ、こちらこそ、お招き頂きありがとうございます。」
しかし、としきは、真田監督の顔が決して笑っていない事に気付いていた。
〝そうとう不満そうだな、監督は・・・・それはそうだろう。いきなり、こんな無名の田舎の学校に呼び出されては・・・・だが、それだけ赤司の発言力が、帝光を支配しているという事か？〟
真田監督に続き、選手達は体育館の中に案内されて行く。そんな中、歓迎の人波の最前列にいる四葉を見つけ、赤司はその前で足を止める。
「・・・君が、そうなのか？」
「そうだ・・・良く来てくれたね。」
「君の思っている通り、僕は一度君と闘いたかった。そのチャンスが今日しか無いのなら、何を押しても逃す訳にはいかない・・・・だが、随分と可愛らしい姿だね。それで、満足に闘えるのか？」
「心配には及ばない。俺達のスキルに、対格差は関係が無い事は分かっているだろう？」
「ふっ、それはそうだが、限度というものがある・・・あんまり、幻滅させないでくれよ。」
「分かっている。」
まるで、〝ラスボス同士の宣戦布告〟が終わり、選手達は体育館に集まる。

三葉達のところに、宮水としきが、似合わないバスケのユニフォームを着て現れる。
「ご苦労だったね。」
「お父さん、お疲れ様っス！」
「やめろ！」
「そんなおっさんの体で、本当にプレイできんのか？」
「流石に、走るのは辛いがな・・・シュートするぶんには問題無いのだよ。」
「あか・・・四葉達は、ウォームアップはしてあるんですか？」
「準備の合間に、多少は済ませてある。元々スタミナが無いから、これくらいが丁度良いだろう。」
そんな三葉達を、冷やかな目で、帝光中学の奇跡の世代達が見つめている。
「何だよ？あの相手は？高校生どころか、女やおっさんやガキの集まりじゃねえか！」
「赤司、かつて無い強敵だと聞いたから、従ってここまで来たが・・・これでは、まともな試合ができるとは思えないのだよ。」
「ところで緑間っち、その〝干し椎茸〟は何スか？」
「今日のラッキーアイテムなのだよ。」
「向こうのおじさんも持ってますね。」
良く見ると、宮水としきも同じ〝干し椎茸〟を持っていた。

「まさか、あのおっさんまで〝ラッキーアイテム〟とか、言ってんじゃねえだろうな?」
　としきの〝干し椎茸〟に、サヤちんが茶々を入れる。
「お父さん、何スか?その〝干し椎茸〟は?」
「わざとらしく聞くな!ラッキーアイテムに、決まっているのだよ!」
　糸守側のチームを見て、真田監督は血相を変えて赤司に詰め寄る。
「赤司、こんな話は聞いていないぞ!何だ、向こうのメンバーは?こんな色物じみた試合ををしたら、帝光の評判はがた落ちだ!理事長に何と言われるか・・・・向こうには申し訳ないが、こんな茶番は断るんだ!」
　しかし、赤司は氷のような目で、監督の提案を却下する。
「監督、この試合に関しては、一切口出し無用とお願いしてある筈です。」
「し・・・しかし・・・」
「責任は、全て僕が取ります。心配しなくても、帝光の評判が下がる事はありません・・・むしろ、後から賞賛される事になるでしょう。」
　赤司は、もうひとりの自分から、この試合の本来の目的も聞いていた。
「お前達にも、一言だけ言っておく。」
　赤司は、奇跡の世代のメンバーの方を向いて話す。
「実際にプレイを見るまでは信じられないだろうが、この相手は、今迄のどの相手よりも

手強い。姿に惑わされていると、足元を掬われるぞ。」

『はあ?』

奇跡の世代のメンバーは、未だに赤司の言葉が信じられなかった。

試合開始の時間が近づく。四葉（赤司）の計画通り、この時間には糸守の全ての住民が糸守高校に集まっていた。お年寄り達は、本祭典の講堂に。殆どの住民は、親善試合の体育館に。バスケに全く興味の無い者は、校庭の出店に。体調の悪い者には、保健室や教室が開放されていた。町の消防団は、町長の命により、糸守高校から人が外に出ないように、学校の周りを固めていた。

「それでは、これより帝光中学と、糸守選抜チームの親善試合を開始します。」

糸守高校の体育教師の号令で、いよいよ親善試合が開始される。

帝光の先発メンバーは、赤司、緑間、青峰、黄瀬、紫原の5人。対する糸守選抜は、四葉、としき、松本、サヤちん、テッシーの5人だ。

ジャンプボールに飛ぶのは、帝光は紫原、糸守はテッシーだ。

〝ピーッ！〟

開始の笛で、紫原とテッシーが同時にジャンプする。当然、紫原の方が高く飛んだが・・・・

「何?」

確かに、高さでは紫原が上だった。しかし、ベストのタイミングで飛んだのはテッシーの方だった。紫原が降下し始めた頃にテッシーは最高点に達したため、ボールを奪ったのはテッシーの方だった。

「も～らい。」

テッシーが奪ったボールを、すかさず四葉が拾う。

「お父さん！」

ボールはとしきへ。

「その呼び方は止めろ！」

としきは、すかさず超ロングシュートを放つ。綺麗な放物線を描き、ボールはゴールリングの中央を通過する。

〝ピーッ！〟

「な・・・何だと？」

「あ・・・あのシュートは？」

驚愕する、奇跡の世代の面々。体育館内には大歓声が上がる。

「ちょ・・・町長凄え！」

「流石、宮水の父ちゃんや！」

「やってくれるじゃねえか！」

青峰が、高速ドリブルで反撃に出る。瞬く間にディフェンスを抜きゴール前に、すかさずシュートに行くが・・・・

「やらせないよ!」

テッシーの壁が立ちはだかり、青峰のボールを叩き落す。

「な・・・何だと?」

「ふん、何腑抜けたオフェンスやってんだ、こうやるんだよ!」

ボールを拾った松本が、お返しの高速ドライブで帝光ゴールに迫る。

「させないよ!」

こちらも、紫原がシュートコースを塞ぐ。

「へっ!」

松本は、完全に不安定な体勢から、そのままシュートを放つ。ボールはボードに当たってから、リング上を一周してそのままリング内に落ちる。

「な・・・あれは?」

「青峰っちの、型無しシュート?」

体育館内からは、またもや大歓声が沸き起こる。

その後、帝光は糸守に圧倒されっぱなしで、5—15と点差が開いたところで、1回目のタイムアウトを取る。

「これで分かっただろう?」
「赤司くん、あ・・・あの相手は、もしかして・・・・」
「そうだ!あのチームは僕達自身だ!」
『な・・何っ?』
「正確に言うと、3年後の僕達だ。訳あって、今日1日だけ、あのメンバーと体が入れ替っているんだ。」
　それを聞いていた、真田監督が口を挟む。
「な・・・何を言ってるんだ?3年後の人間と入れ替ってるなんて・・・本気でそんな事を言っているのか?馬鹿も休み休み・・・・」
「いや!」
　監督の言葉を、緑間が遮る。
「あのようなプレイができるのは、今現在では、俺達以外には有りえないのだよ!」
「信じられないっスけど、目の前であんなプレイ見せられたら、信じるしか無いっスね!」
「はっ、確かに、こんな相手は今迄に居なかった・・・最高に燃えて来たぜ!」
「どうでもいいけど・・・あいつらムカつく。」
「絶対に、負けたくありません。」

奇跡の世代のメンバーの闘志に、ようやく火が点いた。
一方の糸守サイドでは、
「へっ、あいつら面食らってやがるぜ。」
「いい気になるなよ。今迄は彼らは、完全にこちらを嘗めていた。ここからは、本気になって攻めて来る。今迄のようには行かないぞ。」
「望むところなのだよ。」
「このままじゃ、こっちだって拍子抜けっスからね！」
「ムカついたら～、捻り潰すだけだし～」
「松本、お前にひとつだけ忠告しておく。」
「はあ？何だよ、改まって？」
「この試合、どんな事があっても、ゾーンには入るな！」
「はあ？」
「いいな！」
「あ・・・ああ、分かったよ。」
「それから、三葉。」
「はい？」
四葉は、三葉のところに寄り、何かを耳打ちする。

「え?」
「頼んだぞ。これができないと、この試合、多分最後まで持たない。」
「は・・はい、分かりました。」
タイムアウト直後、奇跡の世代の本領が発揮され始める。
「ここからは本気でいくぜ!」
青峰の高速ドライブ、さっき同様にディフェンスを抜いてゴール真下へ。
「させないって言ってるでしょ。」
テッシーが、再びシュートコースを塞ぐ。
「へっ!」
体を完全に仰け反って、ゴールが見え無い状態でシュートを放つ。しかし、ボールは真っ直ぐゴールに向かって行き、見事にゴールに収まる。
体育館内に、驚嘆の声が上がる。
「す・・・凄え!」
「何で、あんなシュートが入るんや?」
更に、緑間の超ロングシュート、黄瀬のスーパープレーも炸裂し、一気に点差は詰まって行く。
「まだまだ行くぜ!」

「させるかよ！」
遂に、青峰と松本の１ｏｎ１となる。
「へっ、俺に勝てるのは、俺だけだ！」
「だから、俺が相手してやってんじゃねえか！」
激しい高速ドリブルの攻防、スキルで上回る松本だが身体能力の差が物を言い、わずかに及ばず抜かれてしまう。青峰は、そのままテッシーも交わしゴールを決める。
「へっ、その程度か？」
「や・・・やってくれるじゃねえか！」
松本の目から、青い稲光が迸る。
「いかん！止めろ、松本！」
四葉の制止を聞かず、松本はゾーンに突入する。
「おかえしだ！」
ゴールポストの真下から、帝光ゴールに向かって突進する松本。
黄瀬も、緑間も交わし、再び青峰との一騎打ち。
「な・・・何だと？」
しかし、青峰ですら、その反応スピードに全く追い付けない。紫原も難無く交わした松本は、そのままダンクを決める。

その圧巻の光景に、体育館内は一時言葉を失う。が、一瞬の静寂の直後に、割れんばかりの大歓声が沸き起こる。

「馬鹿が!」

そんな中で、四葉だけは叱責するような呟きを放つ。

「へへっ、どう・・・・え?」

突然、体中の力が抜けたように、松本はその場に倒れ込む。

「ま・・松本っち?」

「な・・・ど・・どうなってやがんだ?・・・か・・・からだが・・・」

体に全く力が入らず、松本は起き上がる事すらできない。そこへ、四葉が歩み寄る。

「だから、ゾーンには入るなと言ったんだ。ゾーンは心・技・体、全てが究極に高められて初めて発揮できる力だ。借り物の鍛錬の足りない体では、負担が大きすぎる。直ぐに体力の限界を通り越して、当分満足に動く事もできなくなる。」

「さ・・・先に、それを・・・言えよ・・・」

「交代だ、お前はしばらく休んでいろ。」

そうして四葉は、三葉の方を向く。

「お姉ちゃん、出番だ!」

《 第十二話 》

糸守高校のバスケ部員が、動けない松本をベンチまで運ぶ。代わって、三葉がコートに入り、四葉のところまで歩み寄る。

「すまない、もう少しベンチで観察させてやりたかったんだが・・・」

「いえ・・・」

「それで、どうだ?」

「もう少し、観察が必要です。」

「そうか、申し訳ないが、続きはプレイしながらやってくれ。」

「分かりました。」

〝ピーッ!〟

プレイが再開されるや否や、

「お返しっスよ!」

早々に、黄瀬がカウンターショットを決める。

それに対する、糸守選抜の反撃。四葉は、いきなり誰も居ないところにパスを出す。

『?!』

　そのパスは、突然信じられない方向に軌道を変え、としきの手に渡る。としきは、すかさずロングシュートを決める。

「な・・・何や今の?」

「ボールが、変な風に曲がらんかったか?」

　体育館内には、どよめきと歓声が入り混じる。しかし、これを見ても帝光は動じない。

「俺達本人って事は・・・」

「当然、テツも居るよな。」

「ふっ、そうで無くては面白く無い。」

　三葉の加入で、帝光の猛烈な追い上げを多少は緩和できたものの、松本を欠いて得点力の落ちた糸守は、どんどん差を詰められていく。第１Ｑ終了時には、得点は２２―２２のイーブンになっていた。

　ベンチで休む糸守のメンバーを、四葉は冷静に分析する。

〝やはり、相当に体力を消耗しているな。俺は小学生、緑間は中高年、黄瀬と黒子は高校生とはいえ女子だ。次の第２Ｑは、かなり厳しい闘いになる。〟

　一方の帝光ベンチでは、

「へっ、あっちの俺は早々にガス欠で退場か?ざまはねえな。」

「だからと言って気を抜くなよ。体力が無い事は最初から承知の上で、闘いを挑んでいる。何か、企んでいるかもしれん。」
「分かってるよ、久々に本気でやれるんだ。最後まで、楽しませてもらわねえとな。」
第2Q開始早々、帝光の攻撃は更に激しさを増す。
「おらよっ！」
「もらったっス！」
青峰と黄瀬の速攻で、どんどん加点して行く。これに対し糸守は、四葉のパスで帝光の隙を突くが・・・・
「甘い！」
「何？」
としきのシュートを、〝天帝の眼〟で赤司が遮る。赤司は、そのまま糸守ゴールに迫る。
「やらせない！」
テッシーが防ごうとするが、
「頭が高い。」
「なっ・・・」
〝天帝の眼〟によるアンクルブレイクで、テッシーは尻餅をつかされてしまい、難無

く赤司はシュートを決める。

四葉は、赤司よりも優れた〝魔王の眼〟と同等の〝天帝の眼〟を持つが、圧倒的に身体能力の劣る小学生の体では、自分で切り込む事は出来ない。そのため、赤司に一歩遅れる事になっていた。

「やられっぱなしは、我慢ならないっス！」

サヤちんが、痺れを切らして奥の手を出す。青峰が、行く手を阻むが・・・

「何だと？」

サヤちんのアンクルブレイクで、青峰は尻餅をつかされてしまう。ゴールに向かうサヤちんに、今度は紫原が迫るが・・・

「なに～？」

青峰のごときドライブで、これを交わす。そして、ダンクに飛ぶ。

「させないっスよ！」

黄瀬が、させまいと立ちはだかる。

「うおおおおおっ！」

しかし、サヤちんは〝破壊の鉄鎚〟で黄瀬を吹き飛ばしたままダンクを決める。

「ば・・・馬鹿な？」

「き・・・奇跡の世代の技は、俺だってコピーできないのに・・・・」

だが、第２Ｑで奇跡の世代が驚くのは、ここまでだった。ゴールを決めたサヤちんに、四葉が忠告をする。

「サヤちん、〝完全無欠の模倣〟はもう使うな。」

「え？何故っスか？」

「ゾーンまではいかないが、〝完全無欠の模倣〟も体力の消耗が著しく激しい。今の体で連発すれば、たちまち松本の二の舞だ。」

「しかし、このままじゃ離されてく一方っスよ！」

「俺に考えがある。今は我慢するんだ。」

〝完全無欠の模倣〟を封印されたため、以降のサヤちんは帝光に圧されて行く。それでも、中々点差は開かなかった。それは、糸守チームで唯一身体能力で劣らない、テッシーのディフェンスのおかげだった。

「何度もやらせないよ！」

中学時代の紫原に近い長身、バスケ部では無いが家業の手伝いで鍛えられた腕力、それに現在の紫原のスキルが加わったテッシーは、奇跡の世代の紫原に勝るとも劣らない存在だった。

そこで、帝光は黄瀬に変えて黒子を出し、かく乱も交えて攻撃して来た。単調な攻撃から連携による攻撃に代わり、徐々に差は開き始めた。第２Ｑが終わる頃には、５０—

３２と大きく差をつけられてしまった。
　第２Ｑの終了時に、赤司はすれ違いざまに四葉に話す。
「この程度とはね、幻滅したよ。ひょっとしてその姿は、負けた時の言い訳のためだったのかい？」
「ふっ、この程度は想定の範囲内さ。お前達のプレイが今のままなら、まだまだ恐れるに足りない。」
「何？」
　そう答えて、四葉は飄々としてベンチに戻って行く。
「へっ、拍子抜けだぜ。やっぱり、体がおっさんや女子供じゃこんなもんか！」
「もう決まったっスね、この試合。」
「赤司、これ以上試合を続ける意味があるのか？向こうは、もう限界なのだよ。」
「そうでしょうか？」
　もう相手に見切りをつけていた青峰達の言葉を、黒子が否定する。
「はあ？何言ってんだよ、テツ？」
「向こうの僕ですが、プレイの間中、ずっと僕達を観察していました。」
「だから何だってんだ？弱点でも、見つけたってのか？」
「それは分かりませんが・・・・」

「仮にそんなもんがあったって、そこを突く体力が向こうには残ってねえよ！」

一方、糸守側のベンチでは、

「どうだ、三葉？」

「はい、もう大丈夫です。」

「そうか、では、第３Ｑ開始から行くぞ！」

「いったい、何をやる気なのだよ？」

「何と言ったらいいかな？〝擬似魔王の眼〟とでも言おうか？」

『はあ？』

としき、サヤちん、テッシーが首を傾げる。

第３Ｑ、帝光中は糸守を速攻で下すべく、黒子を下げて再び黄瀬を入れて来た。だが、これこそ四葉の思う壺であった。

黄瀬は速攻でサヤちんととしきを交わす。テッシーのディフェンスも巧みに交わして、フリーになったと思った瞬間、ボールを三葉に奪われる。

「何？」

「やるな！」

直ぐさま、青峰が三葉に迫るが、

「なっ？」

青峰の視界から、三葉が消える。〝消えるドライブ〟だ。青峰を交わした三葉は、すかさず四葉にパスを出す。それに対し、赤司は既にとしきへのパスを読み動いていた。だが・・・

「何だと?」

としきは、ボールを持たずにシュートのアクションに入っていた。そして、シュートを放つ寸前のところに四葉のパスが入り、そのままシュートを放つ。ボールは吸い込まれるように、ゴールに突き刺さる。

「な・・・何だ?あのシュートは?」

驚く緑間。しかし、赤司はそれ以前のプレイに衝撃を受けていた。

〝何故、向こうのテツヤは、涼太の動きを読めた?最初からあそこに来る事が分かっていなければ、涼太の動きに付いて来られる筈が無い!〟

今度は、青峰が糸守ゴールに攻め込む。高速ドライブでディフェンスを抜いていくが、

「何だと?」

またしても、三葉にボールを奪われてしまう。

攻撃を悉くカウンターで返され、点差は徐々に詰まって行く。痺れを切らした赤司が、今度は自ら切り込んで行く。その行く手を、四葉が遮る。

「無駄だ！君の身体能力では、僕の動きを読めても止められない！」
「俺ひとりならな！」
「何？」
四葉を交わした先に、既に三葉が回りこんでいた。赤司のボールを奪った三葉は、すかさずサヤちんにパス。そのままゴールと決め付けて、青峰と黄瀬はディフェンスに飛ぶ。
「テッシー！」
だが、サヤちんは囮で、ボールはテッシーへ、
「させないよ！」
「捻り潰すよ！」
紫原を押し退け、テッシーがダンクを決める。
糸守チームの脅威の追い上げに、体育館には割れんばかりの大歓声が湧き起こる。
三葉（黒子）の〝擬似天帝の眼〟これは、長い間培った仲間との絆があって、初めて可能になる連携プレイである。本来なら誠凛の仲間との間でしか使えない技であるが、昔からの仲間であり、ライバルであり、共に〝Ｊａｂｂｅｒｗｏｃｋ〟とも闘った今の奇跡の世代との間では使えるようになっていた。
更に、今の敵である帝光中学の奇跡の世代も、三葉は長年観察して癖を知り尽くして

いた。それでも、3年の時差があるため、試合の前半を使って細かい誤差を修正した。今の三葉は、相手の帝光中学の動きも予測できる。つまり、この試合に限っては、本家〝天帝の眼〟と同様の能力を持つ事になった。

これに、四葉の〝天帝の眼〟によるサポートも加える事により、三葉・四葉の姉妹は、現在の帝光の全ての攻撃の先回りができるようになっていた。

但し、これが可能になったのは、現在の帝光がチームプレイを捨て、個人のスキルに頼った力押しの攻撃に終始していたためだ。もし彼らがチームワークを駆使して、お互いを信頼して連携を取っていれば、こううまくはいかなかっただろう。

敵陣に中々切り込めない帝光は、強引なシュートが多くなり、ミスが目立ち始める。

緑間が、超ロングシュートを放つが、わずかに軌道がずれてリングに弾かれる。

「ちっ!」

リバウンドをテッシーが奪う。すかさずサヤちんにパス。ドリブルで敵陣に切り込んで行くが、マークが付いたところで敵に向かってパス。これを三葉が捻じ曲げ、ボールは四葉に渡る。四葉から後方のとしきに戻され、そこからロングシュート。ボールは吸い込まれるようにゴールに収まる。

「くそっ、何であのおやじのシュートは外れねえんだ?もうへばってるくせによ!」

それは、四葉の〝完璧なパス〟による物だった。しかも、ゾーンに入らないように、微

妙な微調整も入れてパスを出していた。
この糸守のプレイを、ひとり興奮気味に凝視している者がいた。帝光の〝幻の6人目〟、黒子テツヤだ。
〝む・・・向こうの僕達は、お互いを信頼しきってプレイしている。だから、あんな凄い連携ができるんだ・・・・あの人達は、3年後の僕達と言っていた・・・・という事は、今はバラバラな僕達だけど、3年後には、また昔のように・・・・〟
〝ピーッ!〟
ここで、第3Qが終わる。20点近く開いていた点差は無くなり、この時点で、得点は58―58のイーブンになっていた。
ところが・・・・
「み・・・三葉っち、だ・・大丈夫っスか?」
第3Q終了と同時に、三葉が倒れてしまった・・・・

《　最終話　》

第３Ｑが終了しベンチに戻ろうとした時、突然、三葉が倒れる。
「み・・・三葉っち、だ・・大丈夫っスか？」
テッシーが抱えてベンチに運び、ベンチに座らせる。
「第３Ｑの間中、全神経を集中して、敵味方全員の動きを予測していたんだ。疲れは尋常では無いのだよ。」
「だ・・・大丈夫・・・です・・・す・・少し休めば・・・」
「いや、借り物の体で、これ以上の無理は避けた方がいい。ご苦労だったね。」
「で・・でも、四葉っち、三葉っちが抜けたら、第４Ｑはどうするんスか？」
この光景を、反対側のベンチで奇跡の世代達が見ていた。
「何だ、向こうのテツもガス欠かよ？」
「でも、２人抜けたらもうメンバー足りないっスよ。」
「流石に、今度こそ試合はここまでのようだな？糸守高校の部員が代役で入っても、俺達の相手にはならないのだよ。」

しかし、赤司は、黙って相手ベンチを見つめていた。
〝どう見ても、もう限界だ。だが、何故あいつは平静を崩さない？こんな状況で、まだ何か奥の手があるとでもいうのか？〟
「お・・俺が出る・・・」
ベンチの後ろから、そこまで横になって休んでいた松本が、おぼつかない足取りで寄って来る。
「ばかを言うな！そんな状態で、とても最後までもつとは思えないのだよ！」
「三葉にも言ったが、借り物の体に、これ以上無理をさせる訳にはいかない。」
「で・・・でも、第４Ｑはどうすんスか？」
「それを気にする必要は無い。そろそろ時間だ。」
『時間？』
その時、突然凄まじい轟音と共に、体育館全体が大きく揺れ出した。
「うわあああっ！」
「な・・・何だっ！」
「きゃあああっ！」
あちこちで悲鳴が上がり、窓ガラスも割れ、電気も消える。皆、立っていられなくなり、床に蹲るようにして揺れが治まるのを待つ。時間にしては数十秒程だったが、体感

した者は何分にも感じられただろう。
ようやく揺れが治まったところで、消防団のひとりが体育館内に入って来る。
「町長！大変です！す・・・直ぐに来て下さい！」
としきは、四葉とアイコンタクトを交わし、直ぐに呼び掛けに応じて外に出て行く。
この辺の対応は、事前にとしきと四葉の間で打ち合わせは済んでいた。
「な・・・何が起こったんスか？」
「彗星の破片が落下したんだ。」
「ああ・・・そういや、そうだったな？」
松本達は、試合の事で頭がいっぱいになっていて、その事を完全に忘れていた。
少し遅れて、四葉達も校庭に出る。既に3年後で見て来たとはいえ、今しがた起こったばかりの大災害を目の当たりにして、彼らは改めてその悲惨さを実感する。但し、住民全員が糸守高校に集まっていたため、誰ひとりとして亡くなった者はいなかった。
茫然と廃墟を見つめる住民達を見ながら、三葉（黒子）は安堵の息を漏らす。
三葉の横に立っている四葉のところに、赤司が寄って来る。その姿に気付き、四葉は声を掛ける。
「申し訳なかったね、こんな騒ぎにまで巻き込んでしまって。とても、今夜中には東京に帰れないだろう。」

「それは、始めから聞いていた事だから問題無いが・・・最初から、第４Ｑは行えない事を知った上でこの試合を組んだのかい？」
「・・・・そうだ・・・」
「やられたよ・・・だが、あのまま続けていれば、勝っていたのは僕達だ。そう考えて構わないよね？」
「構わない。但し、あくまで試合にはという事だ。それは、お前達自身が良く分かっていると思うが。」
「言っている意味が分からないな、勝負は結果が全てだ。試合の勝ち負け以外に、何があると言うんだ？」
「今は、分からなくてもいいよ。いずれ、誠凛の光と影が、お前達の前に立ちはだかり、その事を教えてくれる。」
　そう言って、四葉は三葉に顔を向け、笑みを浮かべる。それを受け、三葉は優しい笑みを返す。赤司は、未だに納得のいかない顔をしているが、四葉は、もうそれ以上は語らなかった。
「町長？どうしたんですか？」
　役場の職員達が騒ぎ出す。宮水としきが、突然意識を失い倒れたのだ。
「もう時間のようだ。お前達の協力には感謝する。」

最後に、赤司に向かってそう言って、四葉も意識を失い、倒れる。三葉、松本、サヤちん、テッシーも同様だ。糸守の住民達は、訳が分からず騒ぐばかりだった・・・・

急に、周りの景色が無くなり、真っ白い何も無い空間になる。そして、僕達の体は、元の自分達の体に戻っている。でも、体が軽く、実体感が無い。

「こ・・・これは?こ・・・ここは?」

「もしかして、意識だけの空間か?」

赤司くんが言う。気が付くと、目の前に人影が・・・・それは・・・・

「み・・・三葉さん?」

「く・・・黒子くん?」

僕達6人と向き合って、入れ替っていた三葉さん達6人が現れる。

「き・・・君達は?」

「しばらくの間、あなた達の体をお借りしていました。」

三葉さんのお父さんの問いに、赤司くんが答える。

「く・・・黒子くん、い・・・糸守は?町のみんなは?」

「大丈夫です、三葉さん。彗星の破片の落下時には、皆、糸守高校に居ました。皆さん無事です。」

「ほんと?よ・・・良かった・・・ありがとう・・・・」
三葉さんは、目に涙を溜めている。
「な・・・何とお礼を言ったら良いか・・・・」
三葉さんのお父さんが、僕達に感謝の意を表す。
「いえ、礼には及びません。俺達も、本来なら味わう事のできない、貴重な体験ができました。」
「最高の闘いが、味わえたっスからね!」
「俺は、2度とごめんなのだよ。」
「めんどくさかったけど～楽しかったかも～」
「皆を助けるためとはいえ、かなり常軌を逸した行動を取ってしまいました。皆さんの、糸守での印象も大きく変えてしまったと思います。申し訳ありません。」
「そんな事・・・私達のみならず、住民皆を救ってくれた事に比べたら些細な事だ。あとの事は、私達で何とかする。」
「宜しくお願いします。」
「四葉ちゃん、元気でね!勅使河原っちも、名取っちも!」
「え?お兄ちゃん誰?」
黄瀬くんの言葉に、四葉さんは戸惑う。

「そ・・・その呼び方は？」
「あ・・・あの時の三葉は、あなた？」
勅使河原くんと名取さんは、以前黄瀬くんが入れ替わった三葉さんを連想する。
「チャラ男、元気でな！俺が言うのもおかしいが、もう少し真面目に練習しろよ！」
「え？チャラ男って？・・・誰や？あんた？」
松本君は、訳が分からず戸惑うばかりだ。
「黒子くん・・・青峰くん、緑間くん、黄瀬くん、紫原くん、赤司くん・・・み・・皆、本当にありがとう！・・・ま・・また、会えるよね？」
「はい、３年後になっちゃうと思いますけど・・・・」
「うん・・・うん！」
相変わらず三葉さんは泣いているが、その顔は、喜びに満ちている。
段々、皆の体が透けるようになってくる・・・・そして、意識も遠のいていく・・・・

気が付くと、僕達は、御神体の山の頂上の縁に立っていた。
「あ・・・あれ？」
「も・・・戻ってるっス。」
僕達が元に戻ったのに気付き、桃井さんが聞いて来る。

「み・・・皆？・・・お・・お帰りなさい！う・・うまく行ったの？三葉ちゃんは？」
「大丈夫です、桃井さん。三葉さんも、糸守の皆さんも無事です。」
「本当？良かった～っ！」
「ご苦労だったね、桃井。」
桃井さんは、嬉さで少し涙ぐんでいる。
「え～でも～、町はぐしゃぐしゃなままだけど～」
3年前の糸守に飛ぶ前と、変わらぬ景色を見て紫原くんが言う。
「彗星の破片の落下自体は止められていないからな、町は廃墟のままなのだよ。」
「住民はとっくに避難して、どっか他に住んでんだろうよ。」
緑間くん、青峰くんがそれに答える。
「でも、いい所なのに糸守、勿体無いっスねえ。」
と、黄瀬くん。
「何、心配はいらない。人が残っていれば、町はいくらでも再建できる。いずれ、昔のような糸守が蘇る可能性はあるさ。」
「はい！」
赤司くんの言葉に、僕は頷く。こうして、僕達は糸守を後にした。

黒子達の糸守救出劇から、少し時間は遡る。

〝ＶＯＲＰＡＬ　ＳＷＯＲＤＳ〟と〝Ｊａｂｂｅｒｗｏｃｋ〟の決戦の最終局面、シルバーのラフプレイで負傷した紫原に代わって、黒子が登場する場面。その黒子に、熱い声援を送る女性が居た。

「黒子くん、がんばれ～っ！」

火神と黒子は、声援を送る女性の方を向く。

「知り合いか？黒子？」

「いえ、知らない人ですが・・・・どこかで、見た事があるような？」

それは、1年前から東京の大学に通っていて、本当の意味での再会はもう少し先になるが、久しぶりに〝奇跡の世代〟がチームを組んで闘うと聞いて、居ても立っても居られずに駆け付けてしまった〝宮水三葉〟であった。

「黒子くん、みんな～っ！がんばって～っ！不良外人なんかに、負けるな～っ！」